滋賀県文化財調査概要　第6集

甲賀郡甲西町狐栗古墳群
調　査　概　要

1968.3

賀県教育委員会

はじめに

タキイ種苗株式会社が，京都長岡にあった農場を本県甲賀郡甲西町に移転する計画をたて用地を求めたところ，用地内に周知の遺跡，狐栗古墳群の所在することがしられた。保存について協議した結果，幹線道路を迂回させノリ面をかえ，大多数の古墳を保存し，環境整備をはかるとともに，保存の至難な数基については発掘調査のうえ，典型的な例を移築することが決定した。

発掘調査の結果，古墳時代後期末葉の古墳の実態が明瞭となり，それが古墳の終末を示す好箇の資料であるところから，貴重な学術的成果をうることができた。

ここに，その成果をとりまとめ，概要を報告し，多くの人々の参考に供したいと思う。

滋賀県教育委員会文化財保護課長

仁　木　捨　太　郎

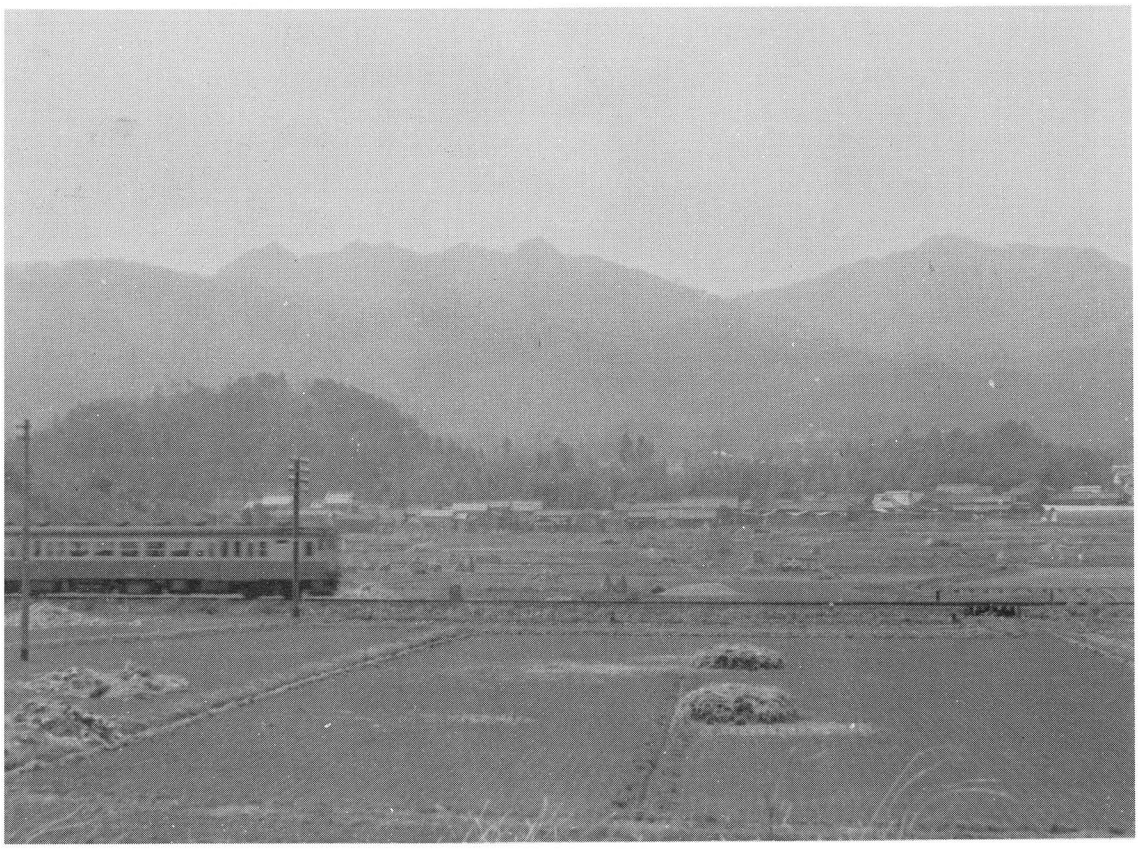
例　言

1　本書は，滋賀県教育委員会が，タキイ種苗株式会社より 1,000,000円で委託をうけ，文化財保護課が担当実施した甲賀郡甲西町所在狐栗古墳群の緊急発掘調査事業の概要報告書である。

2　調査は，文化財保護課技師水野正好を担当者とし，発掘調査に当っては奈良国立文化財研究所，立命館大学歴史学研究会考古学部会，滋賀大学日本史研究室の援助をうけ，整理に際しては，奈良国立文化財研究所山沢義貴，西谷正高島忠平，町田章氏，立命館大学黒崎直，中井貞夫，福岡澄男，丸山竜平，水野和雄の諸氏の援助をうけ，写真撮影については福谷脩氏をわずらわせた。

3　本調査にあたっては，写真，実測図などの記録を作成するとともに，カラースライドを作成した。広く利用されることを希望する。

甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要



経　過

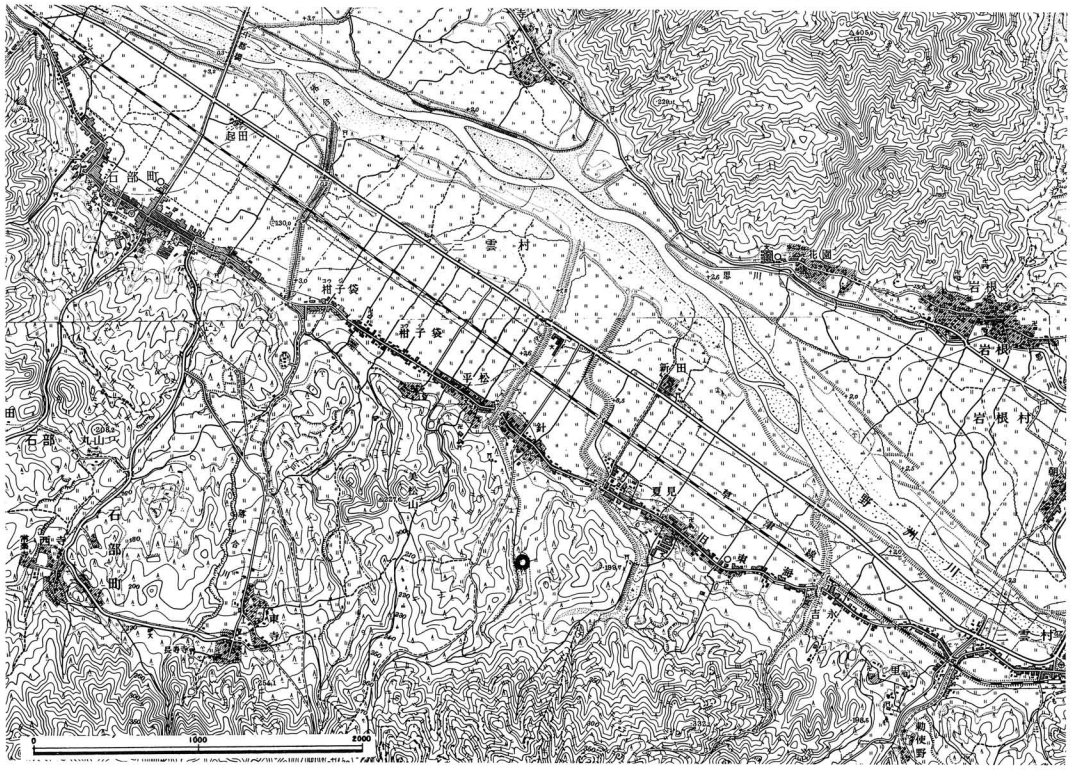
タキイ種苗株式会社（社長滝井治三郎，住所京都市下京区梅小路通猪熊東入 180番地）は，京都府下長岡町に所在する長岡農場が，四周宅地化し，加えて近畿圏整備計画による高速自動車道が農場内を縦貫するため，滋賀県，甲西町の誘致をうけ，滋賀県甲賀郡甲西町大字針の地に農場を移転することを計画し，20ヘクタールを買収し，着々と実施設計をたて一部苗圃の造成に着工された。

昭和42年5月20日，甲西町教育委員会より同事業の概要，用地内における周知の遺跡の所在が連絡され，昭和42年5月22日，本委員会は同町教育委員会，同町文化財専門委員の同道を得，現地調査を実施した。結果，小字狐栗，山ノ神，八田ケ谷に古墳群の所在を確認し，小字城山に針城跡と推定される遺構の存在をたしかめた。従って，昭和42年5月23日この事実を同社に通知し，以後再三にわたり保存協議，現地協議がおこなわれ。

結果，当初，狐栗古墳群18基中12基を埋没し主幹道路を敷設する予定であったが，最終的には主幹道路を迂回させて法面を操作することにより13基を保存し環境整備をはかること，道路下に埋没する5基を発掘調査し典型的な遺構を移築することを条件として両者の協議をまとめた。

昭和42年7月21日，この協議内容にもとづきタキイ種苗株式会社より文化財保護法第57条2項の規定にもとづき土木工事に伴う発掘届が提出され，本委員会も学術調査を内容とする発掘届を提出し，文化財保護委員会の承認を得，昭和42年7月29日より滋賀県教育委員会が主体となり9月10日まで，計44日間を要し調査を実施した。

調査中，新たに2基の古墳を発見したため併せて調査するところがあった。調査は，奈良国立文化財研究所，立命館大学歴史学研究会考古学部会，滋賀大学日本史研究会の援助をうけて所期の目的を達したが，調査後4基を移築することとし，昭和42年9月11日より着手し，9月20日，計10日間を要して終了し，ここに現地での事業を完了した。なお，用地内の山ノ神古墳群，八田ノ谷古墳群については，タキイ種苗株式会社において保存されることとなり，針城跡については土塁を補修し活用されることとなった。　（水野正好）



（50,000分ノ1・地形図）

位　置

本県の中央に北東から南西に横たわる陥没湖琵琶湖が所在し，その周辺に近江の諸平野が広がり，四周は高い地塁山脈が囲繞している。東側には伊吹鈴鹿の諸連山が連り，その南縁は標高500米から600米をかぞえる高原性山地，信楽山地が走る。この西にのびる山地と平行し，北側に西流する野洲川があり，その間に巾1300米の，次第に西に広がる平地が見られる。野洲川と，水田地帯をなす平地，山麓に東西に点在する集落，深い山腹，そうした風景に彩られる人文的景観が東西にひろがっている。

本狐栗古墳群は，阿星山北北東山麓に所在する針集落の後背地，700米の山麓の緩傾斜地に位置するが，阿星山山頂近くより流れでて，針の集落を経て野洲川に流入する針川が，山腹の急傾斜を一気に降り，やや緩傾斜地を少し川幅を広げ西に外弯しゆるやかに流れ，再び急激に流下し針の集落に出るが，その緩傾斜地の外弯する針川の東岸の崖上平坦地に立地している。その位置は，針集落の北方に所在する天神山の小山丘西斜面の最下段平坦面であり，針川の小流をへだてて西にやや高い堂山の尾根が眼前に稜腹をみせている。平坦地は南北 120米，東西90米をはかり，北辺は標高162.5米 を示しており，北は急激に北方へ，西は同様針川河岸に低下し，南方，東方は天神山に発した高地形となり約3.2米 の差をもって高く，この平坦地形が明確にうかがわれる。平坦地全体について見ると，南東から北西に軸を配して，軸線上が最も低く軸線外が次第に高まっており，古墳は大多数この軸線の北東線に沿って配置されており，微地形測量の結果，この軸線上に古道が存したのではないかと考えられるに至った。従って本古墳群の北端，針川を遡り平坦地に入る地点に所在する三基の古墳が大きく低下する平坦縁辺に立地する事実を除けば他はゆるやかな傾斜面面占地するため，二者を区別しうる結果となっている。本古墳群の所在地は，滋賀県甲賀郡甲西町大字針小字狐栗1177，1178，1190～1192，1199－2～3番地に該当し地目山林であったが同社の用地化後伐採され，近く農場内の散遊地として整備される予定となっている。本古墳群より更に針川を遡った山ノ神古墳群も36全基が針川東岸の平坦地に占地しており，本古墳群と相俟って興味ある立地を示している。　（水野正好）

（狐栗古墳群・全景）

古墳群の構成

狐栗古墳群は，南北 120米，東西90米をはかる平坦地に占地するが，この平坦地は南東から北西に漸次低くなり，その軸線が一見浅い谷状を呈しておりその北東縁に3,4基づつ，計21の全古墳が配置されている。この谷状の軸線は針川と斜交しており針川を遡ると自然とこの谷状部分に出るところからみて，自然地形を巧みに利用した旧道であろうと想定される。この道路様の軸谷は 110米南東進して崖部に至るもので本古墳群を連繋する幹線道路とすることができ，その間3.5%前後の勾配をもつことが推察できる。本古墳群の西限を限るこの幹線路は，必ずしも墳丘や横穴式石室，木棺の軸線と一致しないが，このことは幹線路より分岐する支線が存したことを思わしめるのであり，そうした要素を勘案すれば5支線の設定が可能であり，全5支線が北東から南東西に通じ幹線にとりつく結果となる。この事実は南東より北西につく幹線路に直交するものであり，正しくは古墳を形成した墳丘に巧みにとりつく支線路であったことが理解されるのである。

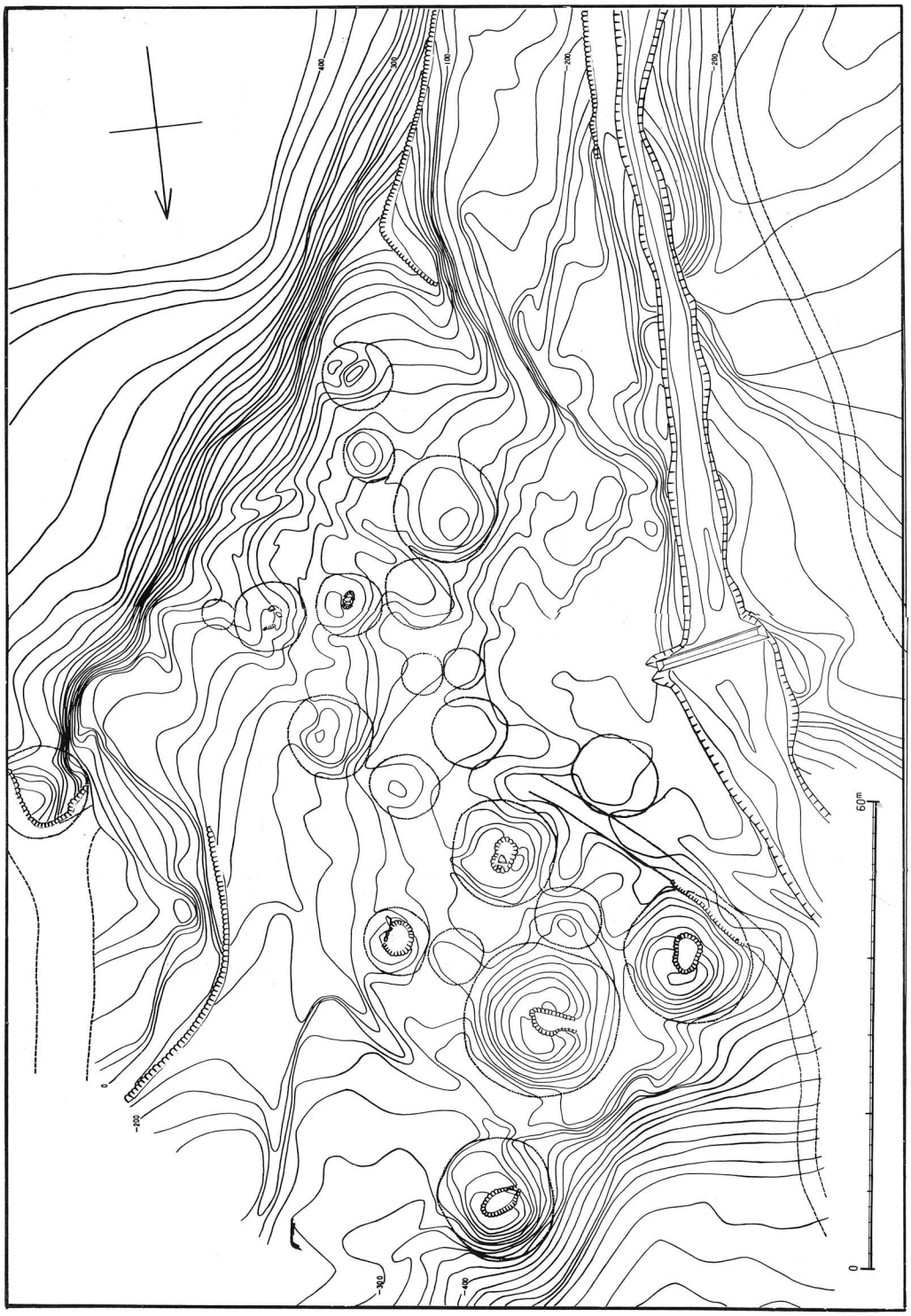
従って5支線路により区分される古墳は，それぞれ小支群を構成することとなり，全21基は7支群に分別することが可能となる。これら7支群は，構成する古墳の基数，内容，存続期などについて共通性がみとめられ，支群の成立はほゞ疑いないものと思料される。次に各支群を南より順次検討したい。

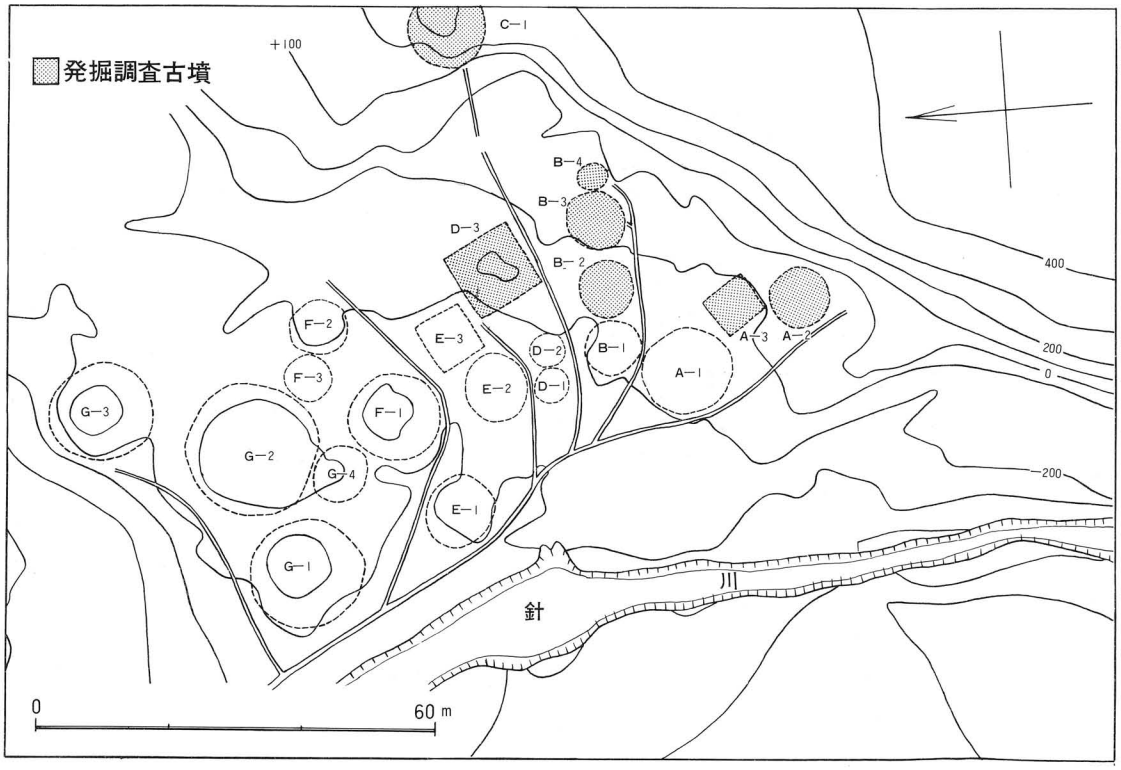
A支群は，本古墳群の最奥部に位置し，3基よりなる。A1号古墳は径13.5米以上の円墳で横穴式石室をもつ。南西に開口する模様で，本支群中最大の規模をもつ。A2号古墳は，径9.4米の円墳で南西に開口する横穴式石室をもつ。A3号古墳は，一辺約7.3米の方形墳で南西から北東に軸を配する2棺があった。

B支群は，A支群の北方に位置し4基よりなる。B1号古墳は幹線路に近く未調査であるが，径9米以上の円墳で横穴式石室をもつ。南に開口する模様で小群中最大の規模となろう。B2号古墳は径10米の円墳で南に開口する横穴式石室をもつ。B3号古墳は径9.3米で南に開口する横穴式石室をもつ。B4号古墳はB3号古墳の墳丘南裾を利用した推定円墳で南に開口する1棺収納の小横穴式石室をもつ。本支群は墳丘相接し南に東西に走る支道のあること，B4号古墳造営時延長されたことが判明した。

C支群はB支群の東北方の崖状部にあり1基であ

（狐栗古墳群・全域実測図）





（古墳群の構成）

る。崖上に他墳が存した可能性もあるが早く開墾開道されみられない。径14.6米の円墳で最大規模の横穴式石室を西向開口し，D支群の支線路を利用する。

D支群はB支群の北方に位置し3基よりなる。D1号古墳，D2号古墳は現状では径5.3米と小規模であるが埋没はげしく恐らく旧規は8米前後であろう。横穴式石室で南に開口する模様である。D3号古墳は本支群の最奥部に位置し一辺約10.8米の方形墳であり南東向きの木棺が存した可能性がみられる。

E支群はD支群の北西に位置し3基よりなる。E1号古墳は径11.4米以上の円墳であり最も幹線路に近く横穴式石室と思われるが開口方位は不明である。E2号古墳は径9.8米以上の円墳で横穴式石室をもつが南東に開口する模様である。E3号古墳は一辺約9.2米を測る方形墳であるが，内部主体は不明。恐らく南東向の木棺が埋置されていると想定される。

F支群はE支群の北西に位置し3基よりなる。F1号古墳は径13.8米以上の円墳で横穴式石室をもつ。南に開口する模様であり本支群中規模最大と思われる。F2号古墳は径9米の円墳であり，横穴式石室を主体とする。恐らく南東に開口するものであろう。F3号古墳は径7.1米以上の円墳であるが石室はみられず木棺直葬の方形墳とすることもできよう。

G支群はF支群の北西に位置し4基の大規模な古墳よりなり盟主的存在である。平坦地最北端入口部に該当し注目される。G1号古墳は幹線路に接し径17米を測る円墳で横穴式石室をもつ。南西に開口する模様。G2号古墳は径19.6米の円墳で北西に開口する横穴式石室をもつ。G3号古墳は径14.3米の円墳で横穴式石室をもつ。南西に開口する模様である。G4号古墳はG2号古墳に南接し径8.6米以上の円墳であるが木棺直葬の方形墳とすることも可能である。

以上7支群を概説したが，各支群にあっては最奥部，ないしは支線路に面する2古墳間背後に木棺直葬の方形墳や小石室をもつ古墳が存し，通有な横穴式石室をもつ円墳とは自づから異った支群内配置をとり，前者の営造が後者におくれることをよく示している。従って支群内の各古墳が時間的に継起して営造されたことはほぼ疑いなく，こうした点から一支群の背後に一古代家族の存することを推測しうるのであり，墓域を7支群にわかつ狐栗古墳群の背景には，古墳時代後期，顕界にあっても幽界同様1集が落7有力家族により構成されていたのではないかと思われ，またG支群がそうした集落を代表する家族の墓域と考えられて，その示す1支群の様相の動きが，また古代家族の時間的なあり方を示すものと考えられ興味深い。（水野）

第 A － 2 号 古 墳

A－2号古墳は，主軸をN－56－Wにおき南西に開口する両軸式横穴石室を内部主体とし，墳丘斜面に外護列石をめぐらした円形墳である。

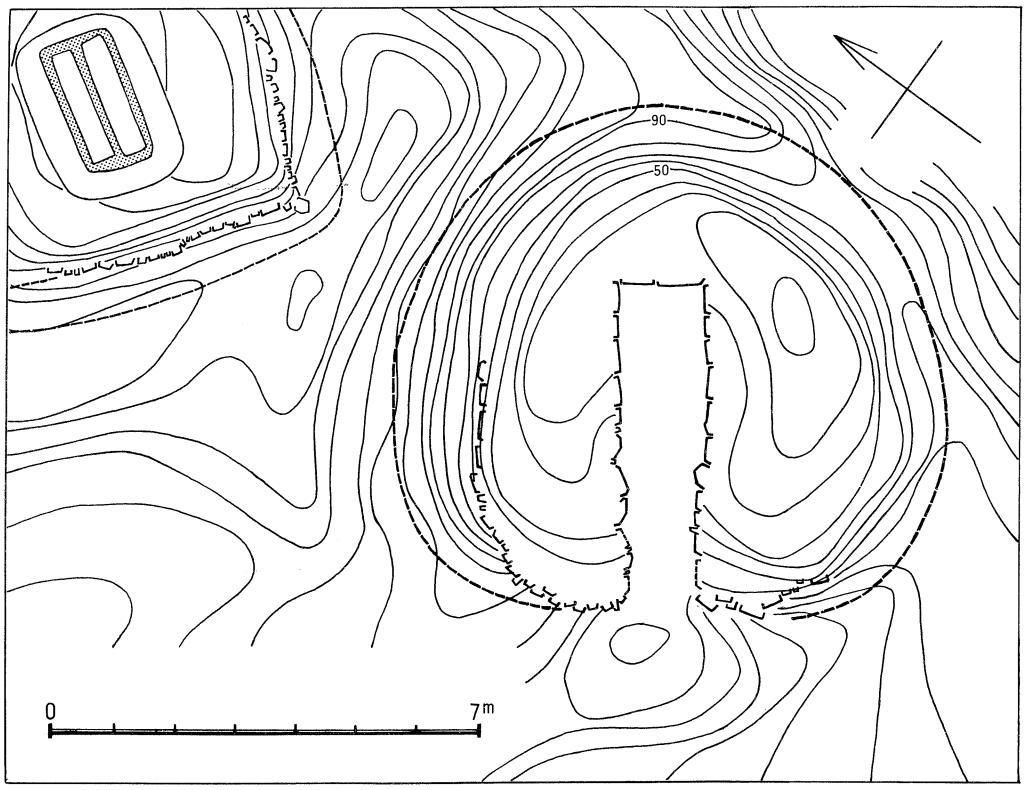
位置　A－2号古墳は狐栗古墳群の中で最も南に位置し，A支群に所属し最奥部に位置する。東から西に下降する斜面に築かれており，今回調査した北側にあるA－3号古墳とは溝をはさんで隣接する。

調査以前にすでに盗掘を受け石材が抜き取られていた為，北東から南西方向に大きな被掘壙が見られた。

墳丘　調査以前の墳丘は東西8.9米，南北9米，墳高1.1米を測った。発掘調査の結果墳丘直径は石室主軸方向で9米，直交して10.5米を測り石室主軸方向の直径が短いことが判明した。現墳高は石室入口と北西側から見るのが最も高く1.7米，東から0.8米ある。推定される墳丘の旧規の高さは約2.5米である。

墳丘築成にあたっては，古墳営造予定地の周囲を若干さげて浅い溝で円形に劃している。しかし羨道の入口の左側附近のみ溝を通さず1.2米幅の高まりを掘り残していることが注意される。その後石室架構と平行して墳丘を形成していったと考えられる。盛土は現在最も厚い左側壁部で1.2米あり，附近の地山とよく似た黄褐色～茶褐色を呈し礫を含んだ土で各々40糎前後の厚さをもった3層からなっている。最下層には若干の炭化物が混入している。外部施設としては墳丘斜面に積まれた外護列石がある。これは羨道部入口に連続して両側に伸びる石積で，保存状況の良好な左側についてみれば，墳丘前面は4～5段積みにし側面にいくに従って段数を減じ左側面では一列になっている。石積上面でレベルをそろえたため側面では斜面中腹に位置することになっている。右側は前面に一部石積が見られるが崩落が激しく旧状を留めない。この列石は前面部を意識して築かれており，墳丘後面には存在しなかった。なお葺石，埴輪等の設置は全くみられなかった。

堀方　北東から南西に主軸を置き南面に開口した長方形を示す掘方で，主軸に直交する幅は2.70米前後，主軸にそっては5.50米前後を測る。壙の深さは東から西に下降する地形に影響されて奥壁部が最も深く70糎



（第A－2号古墳・全景）

（第A 2号古墳・墳丘全景）

次いで右壁部が50糎，左壁は30糎である。玄室部は羨道部より10糎深く掘られており，玄室部の壙底の周囲は側壁の最下底石をすえるためさらに約20糎掘り下げられている。

石室　主軸をN－56－Wにおき南西に開口する両袖式の横穴式石室であり，全長5.10米を測る。玄室部は奥壁幅1.20米を測り，左壁は軸線に平行であるが右壁は入口に向かうに従って外側へ張り出すため袖石内側幅は1.50米拡がっている。玄室の長さは2.95米であり，羨道部の袖石内側では幅1.15米，羨道部では1.10米を測る。

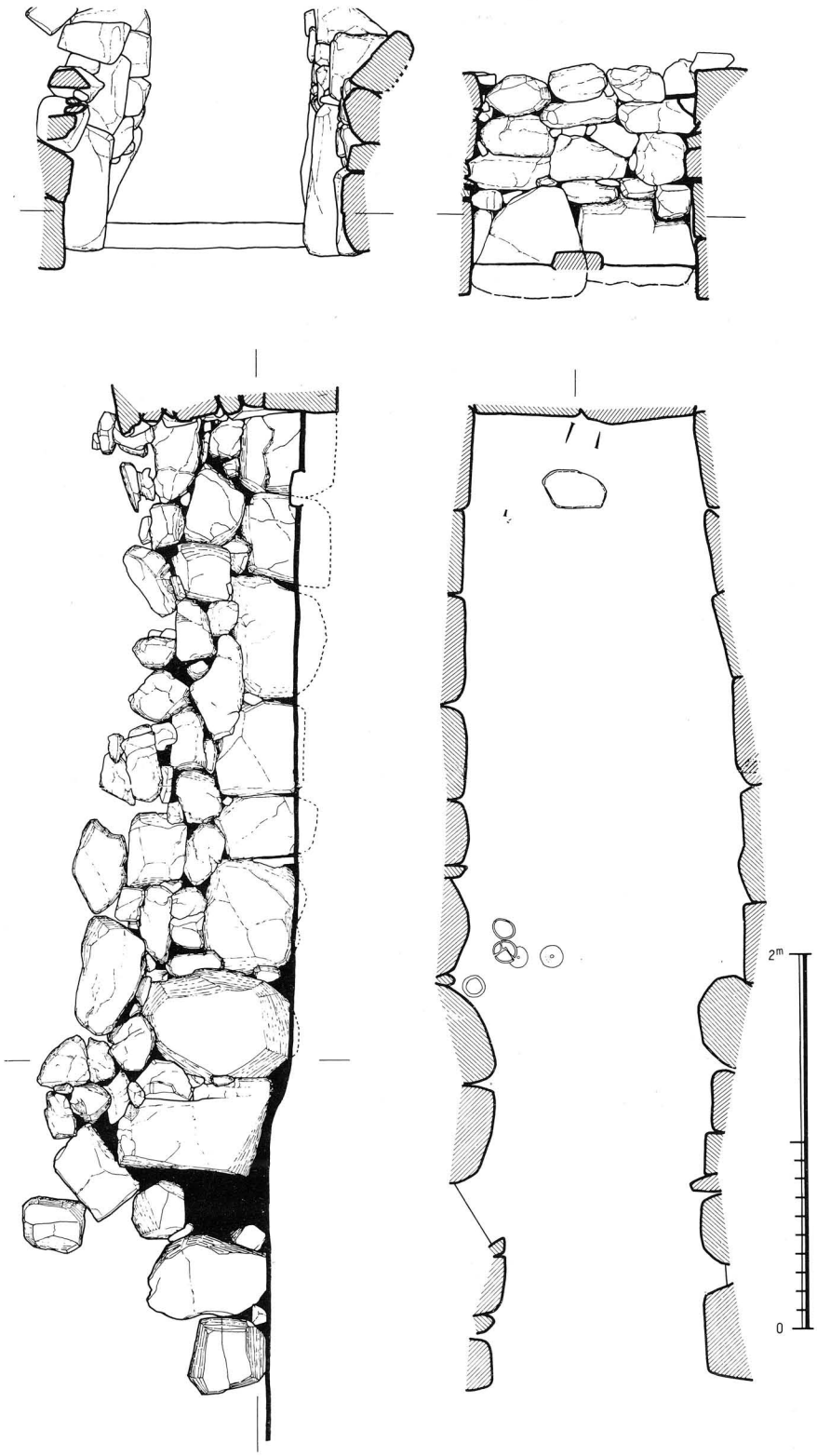
奥壁は現在4段目まで，床面から80糎の高さを残していた。第1段目は大形の石を垂直に使用しており左側壁は縦長の石を縦積みし右側壁には長方形の石を横に積み，この間隔を埋めるために小形の石を横積みし高さをそろえる。その後，確認出来る4段目までやや小形の石を少し内側に持送りながら横積みしている。左側壁は6石をもって玄室部とし，7石目の石を内側に出して縦積みし袖石としている。2段目から上は第1段目の石の半分にも満たない石を積み，あるいは小口積にしており，わずかに持送りが見られる。右側壁も第1段目の石で6石目を縦積みするなど細部では異なるが左右側とも基本的に同じであり，羨道部の第1段は玄室とは異り背の高い石を5石縦積みする。

遺物出土状況

石材抜き取りに伴う盗掘によって玄室中央部床面は攪乱を受けており，原位置に存在すると考えられる遺物は玄室部では右袖部に須恵器坏1点（4），同蓋3点（1～3），同皿1点（7）を，奥壁附近には鉄釘3本のみをとどめる。玄室部攪乱土からは銀製空玉6，ガラス小玉1，鉄釘数本，土師器坏1点を検出した。羨道入口前方1米には供献された状況で須恵器台付長頸壺，同高坏各1点を検出し，その他墳丘裾をうめる黒色土層中より須恵器坏2点（5・6）同平瓶，甕等の破片を検出した。

遺物　坏（4・5・6）は最大径11.20～20糎，口径8.0～9.20糎，器高3.40糎を測る内傾した短いたちあがりを持つもの。（4）は底部外面を右まわりのロクロで削り窯印を施し，内面中央には一方向のなでが見られる。蓋（1～3）は扁平なつまみと大きなかえりをもつものである。（1・2）は上面に2条の沈線をめぐらす全く同形のものである。皿（7）は，口

（第A－2号古墳・石室）

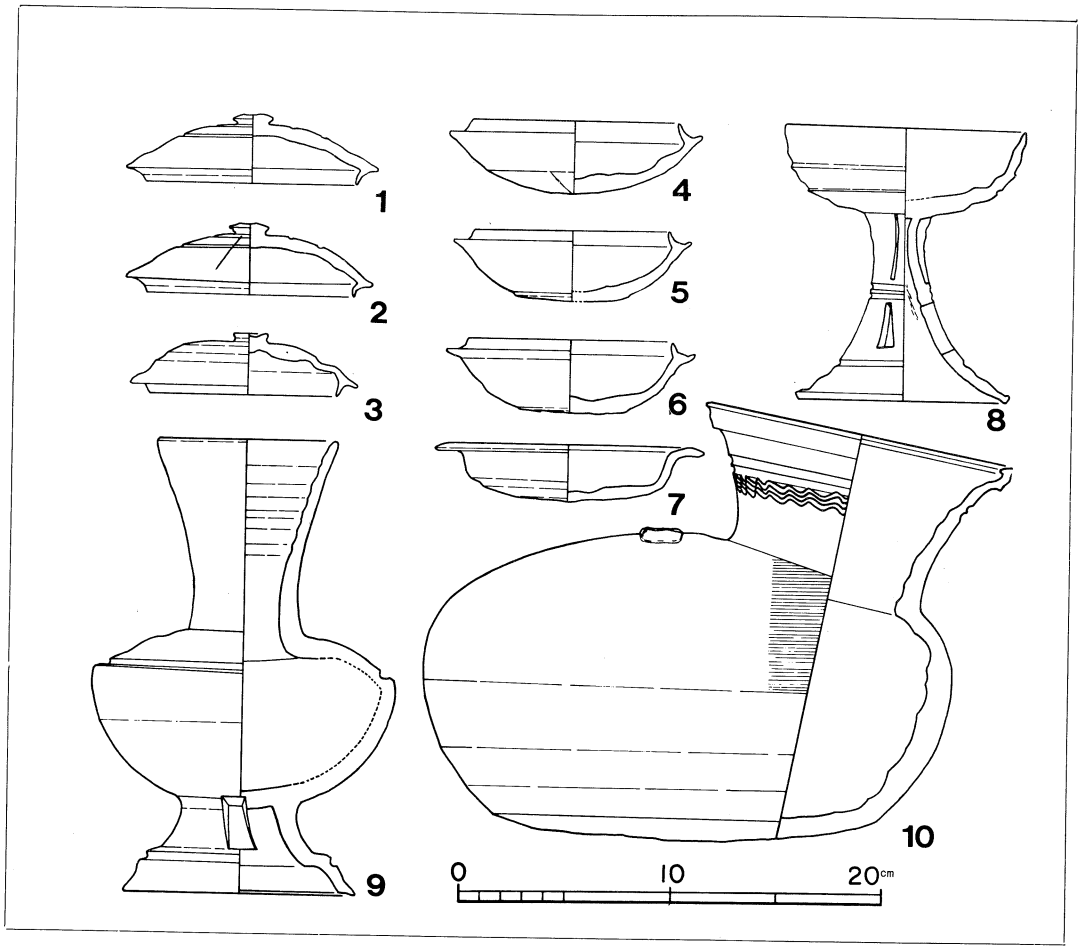


（第A－2号古墳・石室実測図）

径 12.80糎，器高2.60糎を測る口縁部をつば状に外反させたもので底部下面は右まわりロクロでへら削りされている。これら玄室内部の土器は内面中央部に一方向のなでがあり，胎土に白色砂を含むなど共通点が多い。高坏（8）は浅い坏部と細い頸部からラッパ状に広がる脚からなる。坏部には2条の沈線を，脚部には中位と下位にそれぞれ2条と1条の沈線をめぐらし2個3方のすかしを穿つ。台付長頸壺（9）は細い外反する頸部，肩の張った低い体部，屈折して広がる短い脚からなる。肩部脚には1条の沈線がめぐり，脚に施された方形すかしは2方にある。下半は右まわりのロクロでヘラ削りしている。平瓶(10)は，体部径25.20糎，器高21糎，口径15.20糎を測る。平らな底部をもつ肩の張らない楕円形の体部の肩部の一方に，端部を屈折させ外反する口縁部を取りつけたものである。頸部中央には2条の沈線がありその下に櫛描波状文をつける。体部上面には2個の粘土粒をはりつけており，体部下面は左まわりのロクロでへら削りしている。

被葬者と時期　本古墳石室内に於て検出された棺台棺釘，須恵器より2棺の埋葬が直ちに窺える。しかし2棺の配置復原より遺物を何ら伴わないが他にもう1棺埋葬の可能性が考えられ，2体以上の埋葬が行なわれたと想定しうる。すなわち石室主軸線上奥壁中央部に頭を接して臥す1号棺を，石室主軸に平行し，玄門附近右側壁に接して配する2号棺を，2号棺の反対側玄門附近左側壁に接して存する3号棺を各々想定できる。本古墳造営追葬の時期については，石室内，墳丘裾より検出された土器全てが単一の時期形式を示し7世紀前葉と考えられる。

小結　A－2号古墳は，隣接するA－3号古墳によって墳丘西縁裾部の小溝を埋められており，またA支群南端に位置することから，本古墳はA支群3基中第二次に築造されたものであり，7世紀前葉に築造，被葬されたものらもと考えられた。　（山沢義貴）



（第A－2号古墳・実測図）

A－3号古墳の調査

A－3号古墳は，截頭方錐台基の上に埋葬施設である方丘をのせた方形墳であり，木棺直葬を内部主体としている。

位置　本古墳は，狐栗古墳群A支群に所属し，A支群中央部に位置する。西方のA－1号古墳，南方のA－2号古墳の後背部に裾を接して営造されている。

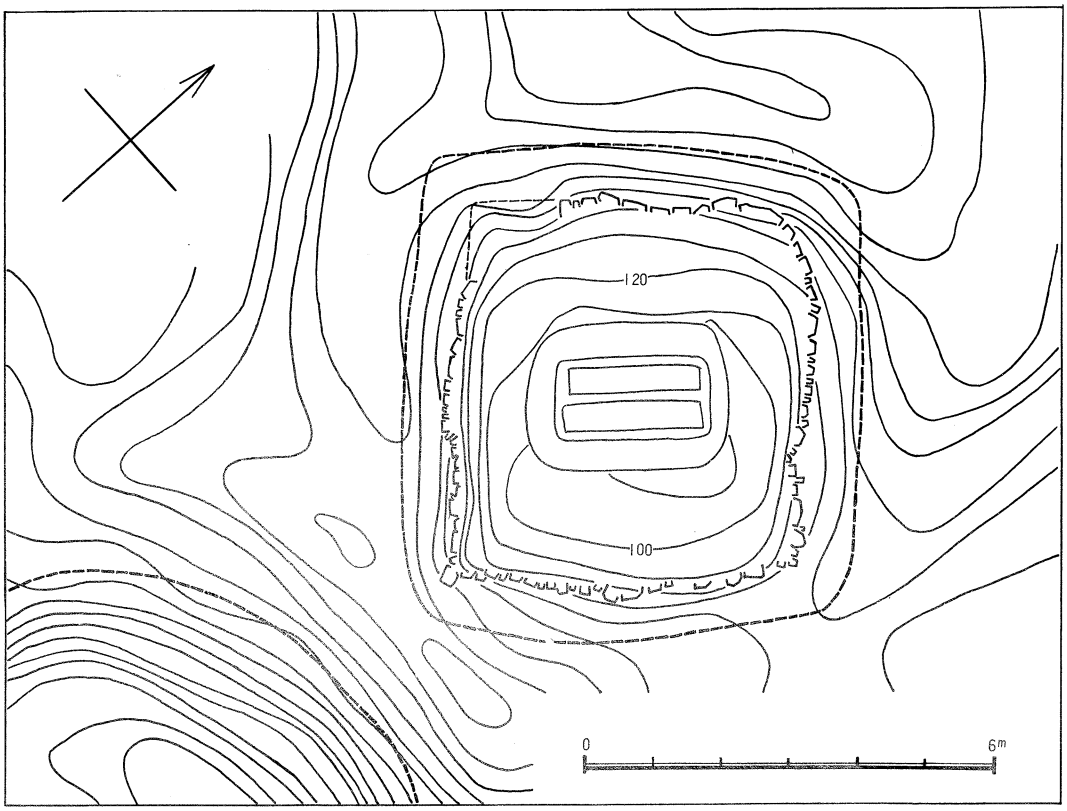
墳丘　調査前墳丘は，東西径6.40米，南北径6.80米墳丘高0.85米を測る円墳と考えられたが，後世の堆積土や流出土を除去した結果，四隅が正しく東西南北を指す，截頭方錐台基の上に方丘をのせた，平面方形の古墳であることが判明した。

截頭方錐台基は東北・西南辺7.30米，東南・西北辺6.90米を測る僅かに東北・西南辺が長い方形であり，台基高は東南より西北に沈む地形に影響され，東南裾25糎，西北裾60糎と差異を示す。台基の形成については，地山を一辺7米の方形で劃し，周囲を僅かに凹め中央高25糎の地山台基を作り，上部に明茶褐色土層35糎を水平に積層している。

上部方丘は，台基上に構築され四周を垂直石積で囲繞した方形の区画であり，東北・西南辺5.75米，東南・西北辺5.30米を測る。現在方丘高50糎を測るが頂部40糎が流出していることが知られ，復原高90糎と想定出来る。現存する石積は西南辺以外最下段を留めるのみであるが，裾部に転落した多量の石材を復原すれば旧規はおそらく大小の河原石を用いて垂直に面を整え5～6段積み上げ，方丘上面にまで及んだものと推定出来る。石積最下段のレベルは地形に影響され，東南辺が高く西北部が低いが上面は水平に整えられたと考えられる。四隅は比較的大きな石を用いて積み上げている。上部方丘の形成は水平に築成された台基上面より黒褐色土層10糎，茶褐色土層40糎を漸次レンズ状に積層しており，方丘上面は平坦水平に整えられたと推定され，石積は黒褐色土層中にその基底部を置くことが注意された。

なお，台基・上部方丘・頂部全面を調査したが周濠や葺石・埴輪等の外部施設は認められなかった。

埋葬遺構の配置　現墳丘表面より約5糎厚の腐蝕土を除去すると直ちに方丘盛土となり，この方丘盛土面



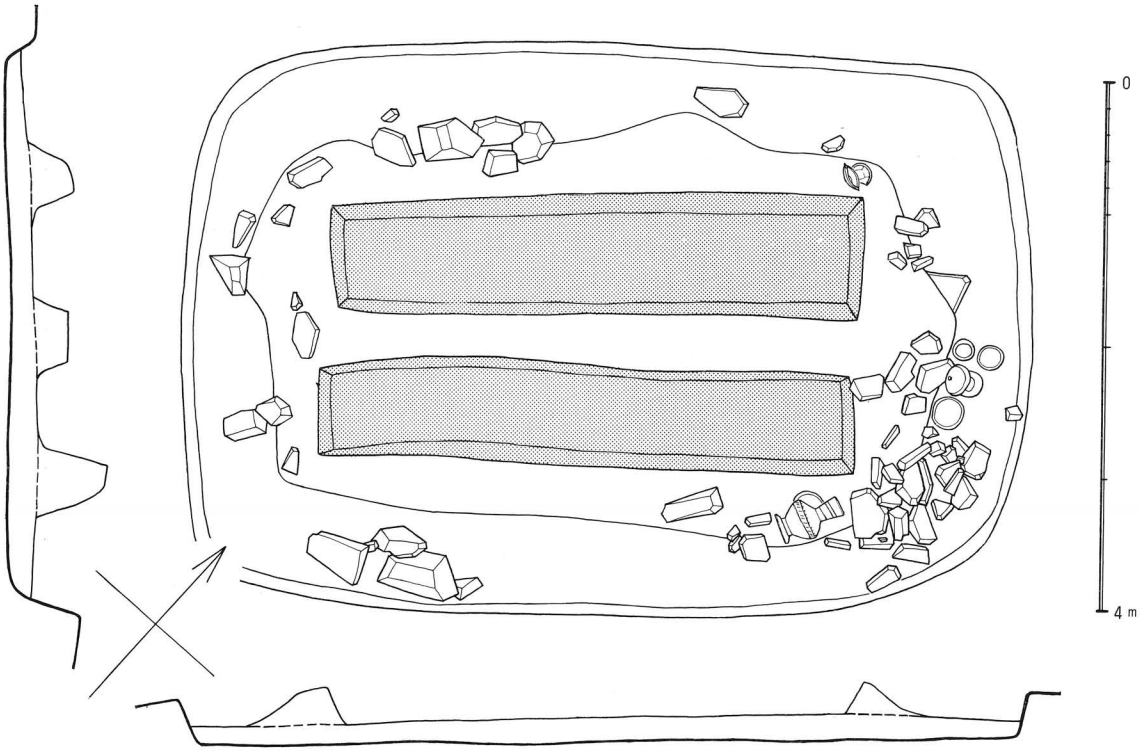
（第A－3号古墳・墳丘実測図）

において検討した結果，同一墓壙内に2基の埋葬遺構の存在を確認した。墓壙は上部方丘中央部に位置し，主軸を台基・上部方丘のそれと同様東北，西南に配し全長3.30米，東北壙巾2.10米，西南壙巾2米を測る隅丸の長方形である。残存深度45糎を測るが，台基部までには及んでおらず，旧現はおそらく80糎の深さを持つ墓壙と推定された。墓壙内には陶質土器9点を伴い墓壙主軸同様東北，西南に主軸を持つ第1号，第2号木棺を安置している。第1号，第2号木棺の埋葬方法は，方丘中央部に広濶な墓壙を穿ち，厚約10糎の粘土層で，墓壙内を整面整床し，2木棺を並置し，のち壙内の空間に河原石を頭部には密に，足部には粗に敷き献供用陶質土器を配している。そして再び粘土で木棺の四周を覆っているが，それが棺上辺にまで及び木棺全体を覆ったかは確認出来なかった。その後，墓壙内に若干の礫を投入しながら，墓壙縁まで水平埋戻作業を実施している。墳丘頂部におけるかような2埋葬遺構の検出に伴い，発掘区を墳丘全面に拡大し，精査したが，裾部に至るまでに他に遺構の存在は認められなかった。

埋葬遺構と葬棺具　第1号遺構：方丘中央部に穿たれた前記の墓壙東辺より56糎の距離をおき，辺に平行して設けられた埋葬遺構である。第1号木棺は全長2.07米，北東端巾39糎，西南端巾35糎を測る平底，直壁の箱形組合式木棺の制にならうものであろうが，底壁ともわずかの丸味を持ち決しがたい。棺底は東北端が8糎高く，棺幅の広狭と共に遺体が北枕に臥したことを窺いえた。棺高は，現存38糎を測るが，以上は平夷され不明である。棺内よりの遺物の検出はみられなかった。

第2号遺構：第1号木棺と同一の墓壙内西辺に平行して設けられた埋葬遺構であり，墓壙西辺，第1号木棺との距離は各々55糎，20糎を測る。検出された遺構は，全長2.05米，東北端幅48糎，西南端幅43糎を測る平底，直壁の箱形組合式木棺であろうと推定されるが，第1号木棺の所見と同じく断定出来ない。棺底は東北端が5糎高く，棺幅の広狭からも第1号木棺と同様北枕の葬位をとったものである。棺高は25糎まで辿りえたが，以上は全く平夷され，確認しえない結果となった。木棺内部よりの遺物の検出は全く認められなかった。

前記の如く，第1号木棺，第2号木棺はいずれも同一墓壙の東，西辺に平行して配されたものであり，2棺の棺底も同じく壙上に成層された約10糎厚の黄色粘土層上に配されている。その上墓壙主軸線上東北端において壙底と同一レベルに置かれた供献用陶質土器数



（第A－3号古墳・内部主体）

（第A－3号古墳・全景）

（第A－3号古墳・内部主体）

点が検出されると共に，2木棺が同一の粘土で覆われており，2棺同時埋葬が想定しうることとなった。

遺物出土状況　A－3号古墳検出に係る遺物は，上部方丘墓壙内9点，墓壙上面1点，墳丘南西裾部5点計陶質土器15点を数え，その他遊離土層中より埴質，陶質土器片若干数を数えた。

上部方丘墓壙内の遺物は，坏蓋1点（1），坏身4点（4～7）が墓壙主軸線上東北端に一括しておかれまた台付長頸壺1点（14），坏身1点（8）が第1号木棺東隅に接し，坏身2点（2・3）が第2号木棺北隅に接しておかれており，木棺に接する4点は木棺を覆う粘土中に完全埋没し倒位，横転位に存した。墓壙上面より検出された遺物は陶質甕形土器であり方丘中心部附近腐蝕土層中に破片となって存し一部墳丘西南裾に転落混入していた。復原すれば1個体を示し，正しくは方丘部一墓壙中心部上面におかれていたものと考えられる。墳丘西南裾部より検出された遺物は高坏形土器1点（9），平瓶形土器2点（10・13），注口土器1点（11），横瓶形土器1点（12）であり，すべて破片飛散して出土したが，正しくは西南辺裾部に一括配されたものと考えられる。埴質甕形土器の細片1個体分，陶質坏身形土器の破片が墳丘裾部上に，後世堆土した黒色土層中より検出されたが，旧位置は判明しえない。

遺物　坏蓋形土器（1）：口径9.8糎，器高3糎を測り宝珠形つまみを持ち，受部を作り出した小形型のものである。上面は篦削りされ，胎土中に白色砂粒を含むが，焼成堅緻である。

坏身形土器（2～8）：坏身は蓋受けのあるもの（2～4・6～8）とないもの（5）に区別出来，蓋受けのあるものは口径11.6～10.2糎，器高3.6～3.1を測り低い蓋受けを持つ小型のものである。粗雑な仕上げで篦削りも充分行なわず，灰黒色を呈し焼成堅緻である蓋受けのないものは口径9糎，器高3.2糎を測る小型のもので僅かにひずんでいる。底部に篦削りを有し，胎土に白色砂粒を含むが焼成は良い。上記の坏蓋（1）とセットである。

高坏形土器（9）：坏径11.8糎，坏高4.2糎，脚高8.2糎を測る。坏腹部に強い稜線1条，脚に2条の凹線を付し，脚端部は大きく外反する。胎土中には白色砂粒を含み，内外黒色を呈している。平瓶形土器（10・13）：口径5.5糎，胴径14.7糎，器高13.3糎を測り，口縁は外反せず無文のものと，口径7.7糎，胴径15糎，器高13.3糎を測り，口縁外反し沈線1条を付すものがある。共に底部に篦削りを有し胎土に白色砂粒を含むが焼成良好黒灰色を呈す。注口土器(11)：口径部約10糎，高8糎を測り口縁部は鋭どく立ち上り外反する。壺部は径7.4糎，高5.3糎を測り2条の沈線を胴部に繞らしその間に刺突文を施こす。径1.5糎の注孔を胴部に1孔穿ち，篦削りは認められない。口縁と底部を損している。横瓶形土器（12）：口径6.8糎，胴部径15.9糎を測り，底部を損するが器高17糎と推定出来る。口縁は緩かに外反し，非常に薄く器肌緻密である。

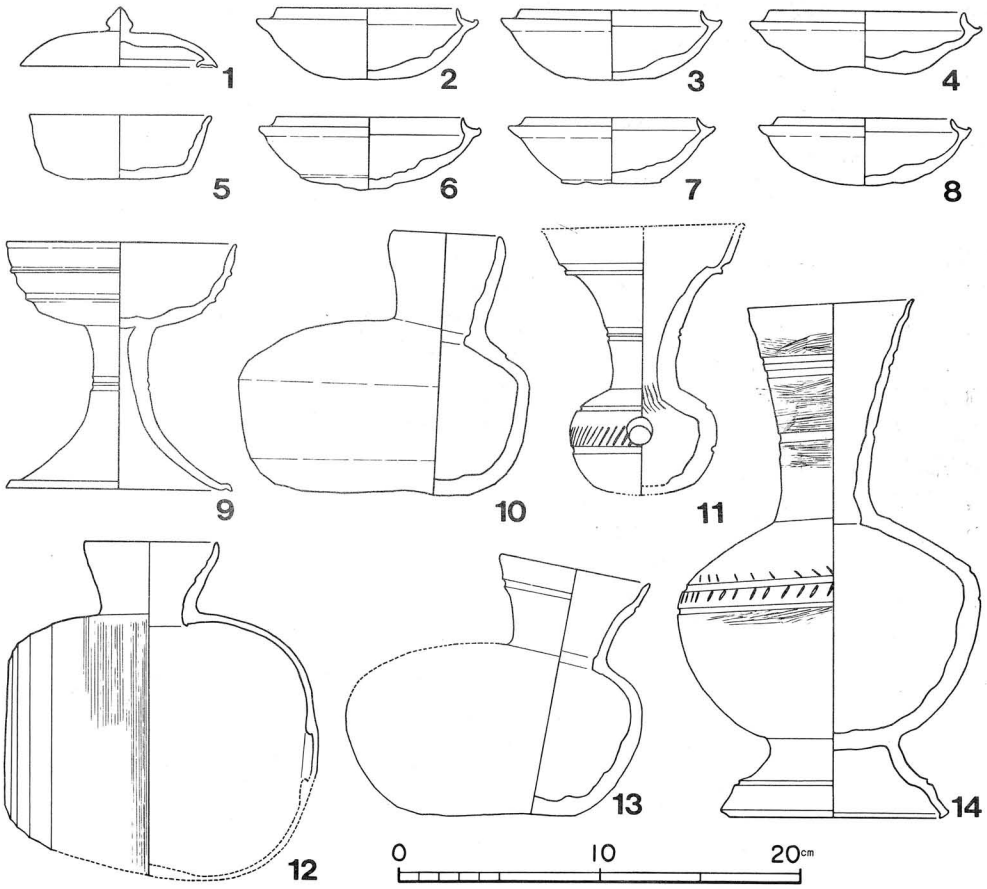
台付長頸壺形土器（14）：口径8.4糎頸部径15.4糎壺部高21.8糎，脚部径11.6糎，高4糎を測る。短脚部に大きく外反する長頸壺を付し，頸部に3条の凹線，壺肩部に2条の凹線と刺突文を有し頸部にハケ目胴下部にヘラ削りを行い焼成よく灰黒色を呈す。

以上の陶質土器は同一時期の形成に伴うものではなく2形式に区別出来る。即ち坏蓋と坏身（1・5）の1セットは他の土器群よりも1形式時期の下るものであり，古い形式の土器群は7世紀前葉，新しい形式の土器群は7世紀中葉に各々位置づけられる。

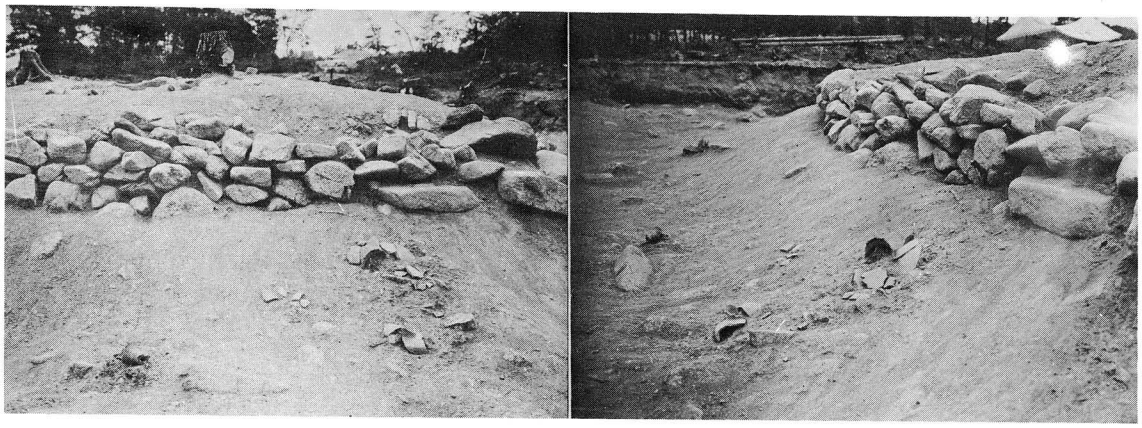
被葬者と時期　本古墳において検出された2基の埋葬遺構は，墓壙の規模，位置等より同時埋葬の事実を示し，第1号，第2号木棺の被葬者は同時，同墓壙に異棺合葬せられたものとなしうる。と共にまた，本墳営造の契機となったものであることも論をまたない。その上，他の木棺直葬墳に多く見られる追葬の事実は全くこれを認めず本来，葬むられた者は前記の二者に終始したものと考えられ興味深い。

本古墳営造の時期については，墓壙内より出土した陶質土器の示す時期に位置づければ良いのであるが，前記の通り同一墓壙内より若干時期の異る2形式の土器が出土している。しかしながら，形式の異る2形式の土器が同時一括副葬されたことは明らかであり，当然本古墳築造の時期は形式のより新しい土器群の示す時期，すなわち7世紀中葉をあてたい。前記の如く第1次埋葬後，第2，第3次追葬は行なわれず，本墳は7世紀中葉に行なわれた1度の埋葬のみでその役目を終了したものと考えられる。

小結　A－3号古墳はA－1号古墳，A－2号古墳築造時に各々形成された裾部平坦面上に南・西隅部を重ねて構築されており，A支群では最も遅く築造されたものである。墳形も截頭方錐台基の上に，埋葬施設である方丘をのせた方形墳であり，他の円墳とそのおもむきを異にする上，内部主体も木棺直葬の構造を持ち横穴式石室とは自づから異なる。A支群中第二次営造に係る本古墳と7世紀前葉築造の2基間に各種の差異が認められ注目をひいた。　（黒崎　直）



（第A－3号古墳・遺物出土状況）



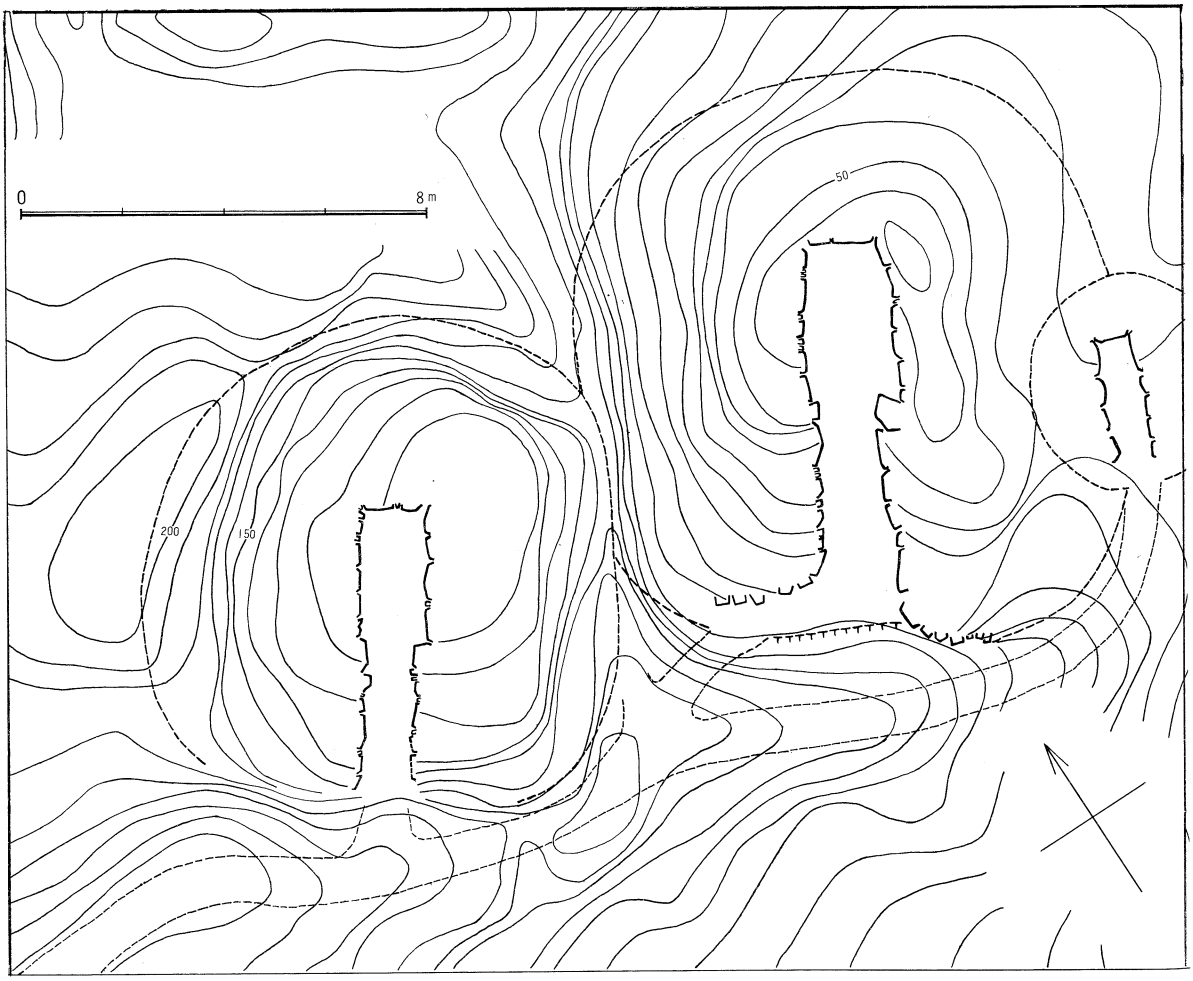
第Ｂ－２号古墳

Ｂ－２号古墳は，主軸をＮ－24－Ｗにおき南西に開口する両袖式の横穴式石室を主体部とし，墳丘斜面下段に外護列石をめぐらした円形墳である。

位置　本古墳は４基からなるＢ支群に属し，東側緩斜面上方には発掘調査を行なったＢ－３号古墳の西側にはＢ－１号古墳が所在し，その間に後に割り込んで営造されている。

墳丘　調査前の墳丘径は東西8.7米，南北7.2米，墳丘高は旧地表の影響を受けて斜面下方にあたる西裾で１米・北裾で45糎・南裾で40糎・東裾で10糎を測る。発掘調査の結果，墳丘径は南北11.2米・東西10米あり石室主軸方向に長い楕円形平面を示す。墳丘高は西裾で1.5米・石室入口前方から1.3米・奥壁後方から90糎・東裾で90糎を測る。推定正面高は約３米である。

本古墳の営造時には既にＢ－１号古墳が存在していた模様であり，Ａ－２号古墳，Ｂ－３号古墳でみられた墳丘築造時掘穿する墳丘を全周した溝はなく，石室の南北両側に巾２米，深さ30糎前後の弧状の溝が設けられたようである。その後，石室架構と墳丘盛土が交互に行われた。盛土は現在中央部で約80糎残存する。これは40糎前後の２層からなり，下層は明褐色土，上層は茶褐色土である。下層上面は石室最下底石上面レベルにそろえる。外部施設としては本古墳とＢ－１号古墳の間にある隆起部と外護列石をあげることができる。前者は石室入口に左方５米にあって，３×2.5米，高さ50糎を測り，墳丘に続く高まりで大小の石が上面に配されている。隣接Ｂ－１号古墳に伴うものか，あるいは両古墳をつなぐ施設であるのか，その性格は不明である。外護列石は羨道入口両端から始まり，左側は一列に並べた石列を前面から側面まで確認した。右側は判然とはしないが，残存する石列は側面途中までで完全に繞っていない。



掘方　本古墳はA－2号古墳・B－3号古墳にみられるような石室規模全体を掘り下げた長方形掘方は設けていない。本墳では東から西に傾斜する旧地表の高い部分，即ち奥壁と右側壁部分のみ10～20糎L字状に掘下げ石室床面レベルをそろえる。その後，石室最下底石を安定させるために浅い溝を予定する石室に合わせて掘方の両側壁，奥壁ぞいに掘ったものと考えられる。

石室　主軸をN－24－Wにおき南西に開口する両袖式の横穴式石室である。全長5.35米を測り，規模は小さい。玄室長2.65米，奥壁巾1.2米あるが，奥壁に接する両側壁第1石をやや外にひろげて1.4米とし，第2石から袖石内側まで平行にそろえ，この巾を保っている。袖の出は右が大きく35糎，左は16糎である。羨道は長さ2.7米，袖石巾90糎，入口に向うにしたがってやや巾を増し羨門で約1.1米を測る。天井石と側壁上半は既になく，現状では一部3段目まで，高さ1.1米をみるにすぎない。

石室架構方法は規模は小さいが，石の使い方はB－3号古墳石室とよく似ている。奥壁は最下底石に大形の2石を使用し，左側には略長方形の石を横にたて，右側は前者より大きい石を縦積みする。この間隙を埋めるために小石を横積みして高さをそろえ，その上に第2段目の石を横積みしている。奥壁はごくわずかであるが持送りがみられる。左側壁は石を横積みにして玄室とし，大型の石を内側に出して縦積みして袖石とし，3段目で袖石の高さまで積んでいる。右側壁も基本的な相違はみられない。羨道両壁においても，小石を用いるほか同様である。側石は最下底石から少しづつ持送りがみられる。

玄室内部には第2次床面下5糎に当初の床面が認められた。玄室内部の施設として棺台がある。玄室中央部左側よりに自然石を配した棺台と考えられる遺構を検出した。これは奥壁側に65糎×30糎の石を軸線に直交しておき，玄門側に90糎の間隔をおいて小形の2石を大石に平行してならべさせたものである。平らな床面におかれているから奥の大石の方がレベルの高いのは当然である。

遺物出土状況　本古墳の遺物は旧状をよく保っており，石室内部，羨道入口前方の溝から検出した。これらの遺物は出土した位置関係から，第一次埋葬にかかわるものとして玄室に一群，第二次埋葬のものとしては玄室に三群，羨道に一群を確認した。前述したように玄室床面は二次であり，第一次埋葬時の陶質土器の坏・坏蓋・高坏蓋は玄室袖石内側，下層の床面から出土した。第二次埋葬に伴う遺物群は全て上部床面上にあ

（第B－2号古墳・石室）

る。奥壁付近には陶質土器不・坏蓋・短頸壺・平瓶などと，玄室中央左よりの棺台附近には多数の鉄釘，玄室右袖石内部には陶質土器高不・短頸壺，羨道袖石附近には鉄釘と陶質土器片を若干確認した。

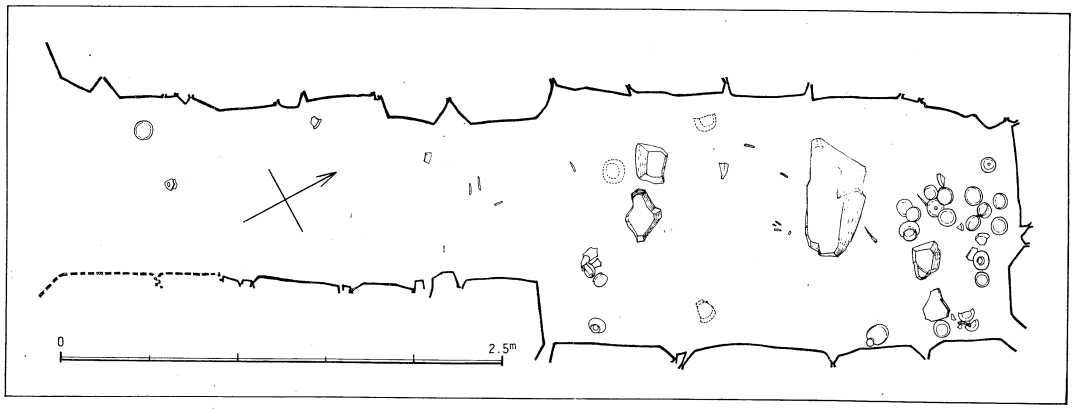
遺物　第一次埋葬時の遺物不身（14）はやや平たい底部から外傾した後，屈折して上方に伸び口縁部にいたるものである。端部はくの字形にまがる。底部はロクロによるヘラ削りをほどこす。薄手，精巧な作りである。（3）は最大径12糎の底いたちあがりをもつもので，底部はケズリはない。坏蓋は二種類あって（10）はつまみを持たないヘラ削りされた頂部と，かえりをもつ口縁部からなり坏（14）とセットをなす。（2）は口径11.4糎を測る平らな頂部から内彎して端部にいたるもので，上面はヘラ削りをほどこす。高坏蓋（1）は右まわりロクロでヘラ削りされた頂部に中央の凹んだ小さなつまみをつけ，口縁部との境に浅い段をつける。

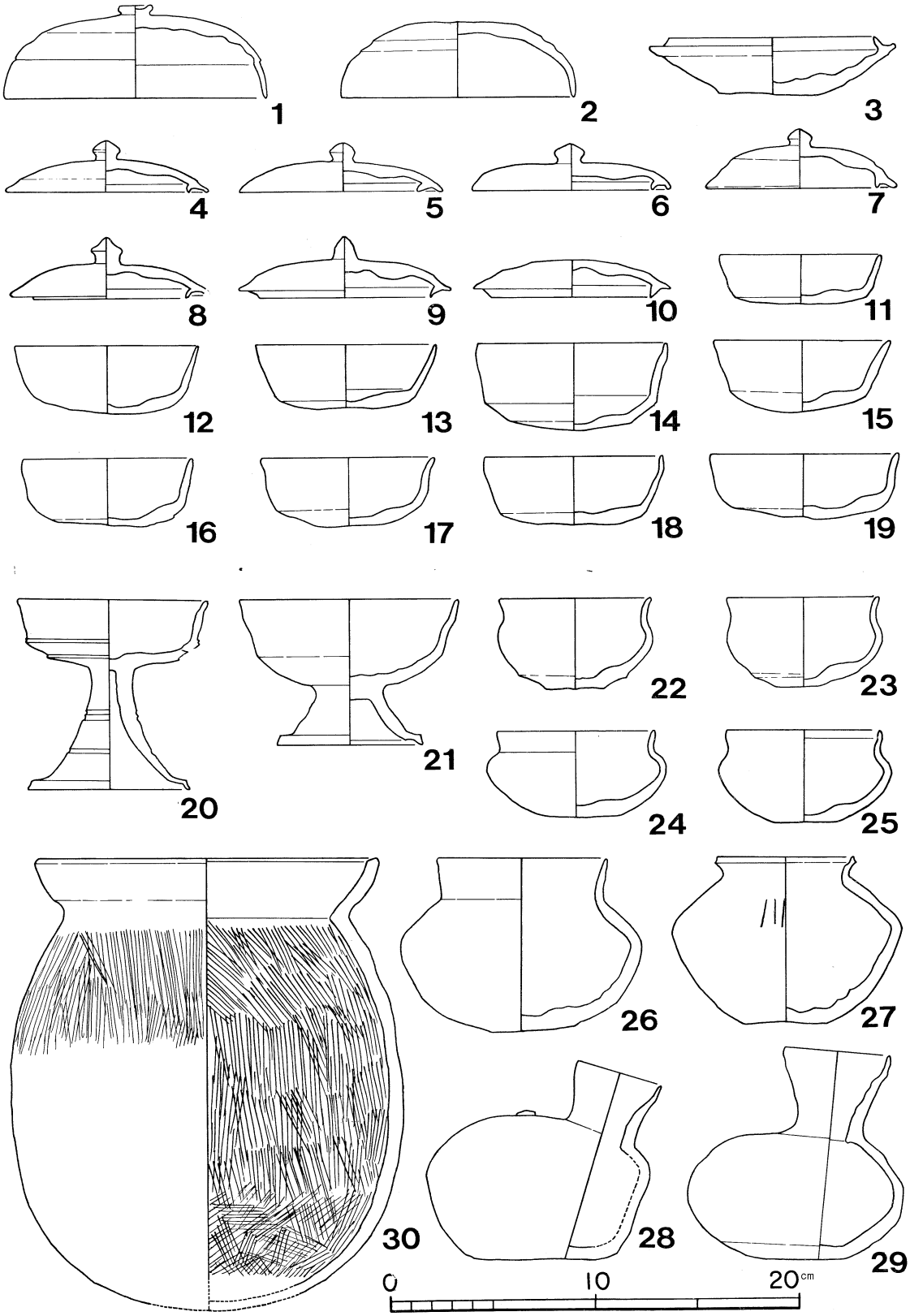
第二次埋葬時の遺物坏（11〜19）は，口径8.5〜9.5糎，器高3.5〜4.5糎を測るほぼ平らな底部とまっすぐ外に開く口縁部からなる小形の器である。このうち底部を右まわりのロクロで削ったもの（11〜15）と削らないもの（16〜19）がある。蓋（4〜9）は最大径9.4〜10.5糎，器高2.2〜3.0糎を測る宝珠形のつまみを持ち端部にかえりをもつものである。受部とかえりとが水平なものが多いが，（9）はかえりが内側下方に出ており，つまみも乳頭状を示す。これらの蓋は上面のみ灰白色を呈し，身とともにセットをなして正常位に焼かれたものである。高坏は2種類あって，2条の段をめぐらした浅い坏部と細長い脚をもつもの（20）と，深く大きな坏部に太く短い脚をつけたもの（21）がある。短頸壺（22〜27）は平らな底部と，やや肩の張った胴部，上方にたちあがる広口の短い口頸部からなるもので大形のものと小形のものがある。（27）は肩の張りがつよく口径も小さく他と形態を異にしており，肩部に縦三条の沈線がある。小形のもののうち，（24，25）は底部にヘラ削りを施す。提瓶（28，29）は，矮小化した小形のもので，（28）の体部上面には2条の直線があってその間に小さな粘土粒を1個張り付けている。埴質土器甕（30）は楕円形の体部と屈折してやや内彎する口頸部からなるもの。体部外面は上半部に縦方向にハケ目，下半部はヘラ削り，内面にはハケ目がみられる。鉄釘は断面0.4糎の四角形を呈し，長さ7.6糎を測るものである。

被葬者と時期　棺台を除いて直接埋葬状況を示す遺構はなく，遺物の出土状態から推定せざるを得なかった。埋葬された遺体は石室の巾に規定されて主軸に平行して置かれたのであろう。第一次埋葬にともなう遺物は大部分が次の埋葬時に取りかたずけられたようであるが，玄室入口側に残された土器類からここに当初の1棺が想定される。奥壁附近の上層床面の土器群は鉄釘とともに三石でしつらえた棺台上の遺体にともなうものとみられ，石室東側壁脇に1棺，羨道部に1棺計3棺が第二次埋葬と考えられる。本古墳の営造の時期は，B－3号古墳々丘との重複関係から相対的にはB－3号古墳築成以後にもとめられ，遺物の形式から7世紀前葉に位置づけられる。第二次埋葬は陶質土器坏身，蓋などの形式からみて7世紀中葉であろう。

小結　B－2号古墳の東裾はB－3号古墳の南裾の上に重複して築成されている。本古墳は玄室内に床面を二枚持ち，第一次床面より7世紀前半の陶質土器，第二次床面より7世紀中葉の遺物が出土し，少くなくとも4体以上の埋葬が考えられる。（山沢義貴）

（第B－2号古墳・石室平面図）





（第B—2号古墳・遺物実測図）

第B－3号古墳の調査

B－3号古墳は主軸をN－21－Wにおき，南西に開口する両袖式横穴式石室を内部主体とし，墳丘前面に外護列石をめぐらした円形墳である。

位置　本墳は古墳群中央部南東にあって，4基からなるB支群に所属する。B支群の古墳は東から西に下降する斜面に構築されており，本墳はこのうち斜面上方にあるB－4号墳と，下方にあるB－2号墳とに墳丘を相接して営造している。墳丘中央部は調査以前石材の搬出にあい，南北方向に盗掘壙が見られた。

墳丘　調査以前の墳丘は東西9.50米，南北9米，墳高0.75米を測り，東裾部は土砂の流入のため墳頂部より逆に15糎高位を示した。発掘調査の結果，墳丘東，西両裾とも隣接するB－2号，B－4号古墳築造の際に削除され現在正確な墳丘規模は知りえないが，復原すれば，東西径10.5米，南北径13.8米を測り，石室主軸方向に少しひずんだ円墳であると想定しうる。現在墳高は東から西に下降する地形に影響され差異を示し西方1.40米，石室入口前方1.20米，石室後方80糎を測る。東裾部はB－4号古墳主体部が構築され墳高は不明である。墳頂部1.40米が流失していることが知られ復原高2.80米と想定出来た。墳丘築成にあたっては，古墳営造予定地選定後，墓壙掘り下げと相前後して地山に巾2米前後，深さ30糎前後の周溝をめぐらして，高60糎の円錐台状地山台基を形成する。その後地山台基上に石室築造と関連して盛土を行っている。盛土は現存80糎を測り地山層と類似した黄褐色土をレンズ状に積層しており，礫を多く含む下層と，より少ない上層との2層に区別でき，各々40糎を測る。

外部施設としては，石室入口両端に始まり，墳丘裾に沿い左右に伸びる外護列石がある。列石は20糎大の石を用いて高く40糎の斜面を水平に配されている。現在，左側には5石をもって一列に並べ，右側は一部4段積みにして横へ2米までのばしていることが知られる。この列石は，入口前面部を意識して築かれており墳丘側面及び後方部には存在しなかった。墳丘裾部の調査の結果，葺石，埴輪等の設置は全くこれを認めなかった。

掘方　北東から南西に主軸を置き，南西に開口した

（第B－3号古墳・全景）

長方形を示す掘り方で，主軸方向に沿い全長8.40米前後，巾3.30米前後を測る。壙の深さは東から西に下降する地形の影響を受けて，右壁部が最も深く65糎をはかり，ついで奥壁部が44糎あり，左壁部はわずかに5～10糎をはかるにすぎない。壙底部は平坦であるが，奥壁部が低く羨道入口部に向かって，やや高くなり，その差は約10糎を測る。壙底の周縁は，最下底石をすえるため，一段下げられているから，壙底面の横断面はベッド状を呈している。

石室　主軸をN—21—Wにおき，南西に開口する両袖式の横穴式石室であり，全長は7.35米を測る。玄室部は奥壁巾1.50米であるが，左壁がやや中ぶくらみに右壁はななめに，共に巾を増しており，玄門部では巾1.80米を測る。玄室長，袖巾とも左右に差が認められ玄室左側2.95米，右側3.15米，袖巾左側15糎，右側30糎を各々測る。羨道部は軸線に対してやや右側にふれ，入口に向かうに従って，巾を広げており，羨門部巾1.20米を測る。羨道部においても左壁と右壁でその長さに相違がみられ，左壁は3.35米，右壁は4.15米である。従って，羨門部では右壁が80糎外に出ており注意を引く。恐らくB支群南側を通る墓道が，墳丘左方より斜めに西南裾をかすめ，東方（主軸直交方向）に伸び羨門部に取りつく結果この右側壁突出部が墓道正面として意識されたものと想定される。このため，石室外方は東西3.6米，南北0.9米をはかる方形の平坦な前庭部となり，墓道とは異なる機能が推定できる。

奥壁は現在最下段2石を留めるのみであり，長方形を呈する大小2枚の石で構築され，右側は背の高い石を縦積みし，左側は若干小形の石を配している。石室架構の際，石室の長さを決する袖石と共にまずこの2石をすえ，石室巾を決定したことが知られる。左側壁は奥壁より第1石目を大形石で縦に積み，第6石目を15糎内側に出し袖石としている。その間奥壁や袖石とレベルをそろえ2段積みしている。右側壁は左側壁の所見と同様であるが袖石が大きい。羨道側壁は大小の石を横積みし，凹凸を袖石のレベルにそろえ第1作業面としている。右側壁では小型の石を小口積みしていることが注意された。なお床面を精査したが，排水施設は認められなかった。

遺物出土状況　石材抜き取りの際，玄室中央部床面は相当攪乱をうけているが，原位置にとどまると考えられる遺物は，玄室に2群，羨道に2群，羨道入口前

（第B—3号古墳・石室）

方の墳丘斜面に1群，計5群を検出した。そのほか墳丘をまわる溝の中から若干の埴質，陶質土器片の出土をみた。

玄室奥壁附近A群には須恵器坏身5，同坏蓋1，金環1，玄室左袖内側B群には須恵器坏身2，同短頸壺1，土師器甕1，羨道部右袖部C群には須恵器短頸壺1，同長頸壺1，袖右より約1米入口よりD群には須恵器坏身1，同坏蓋1，同鉢1，鉄鏃1，羨道入口前方E群には須恵器双耳壺1，同短頸壺1，土師器甕1を確認した。

遺物　坏身（3～12）は，口径8.90～9.60糎，最大径10.5～11.4糎，器高3.20～3.70糎をはかる丸い底部と内傾した低いたちあがりを持つ小形化の著しいものである。底部はヘラ削りしていない。（5）は器高の一番大きなものでたちあがりもほかにくらべてやや高く，受部が大きく外に出るなど，ほかのものと様相が異なる。胎土中に白色砂粒を含み焼成は良い。坏蓋（1，2）は丸い頂部と垂直に近くおりる短い口縁部からなる小形のもので，頂部は削りを施さない。鉢（13）は斜直する口縁端部を内側にまげたもの。長頸壺（14）は肩の張った平底の胴部に外反する細長い頸部をとりつけたもので，頸部中央と肩部にそれぞれ2条の沈線をほどこし，底部と胴部下半は右まわりのロクロで削る。短頸壺は大小2種あって小形の（17）は丸い胴部から垂直に立つ口縁にいたるもので，ロクロ目がよく残っている。底部は削っていない。（16）は平らな底部と肩の張った胴部，やや外反して端部が内側に折れる口頸部からなる。頸部中央に1条の沈線があり，胴部下半から底部にかけて右まわりロクロで削る。双耳壺（15）は，下方に張りのある丸い胴部からゆるく内弯しながら端にいたるもので，頸部両側に粘土紐を環状にした耳をつけている。金環は銅芯を金箔で覆った通有のもので，長径2.76糎，断面は長径0.76糎の楕円形である。

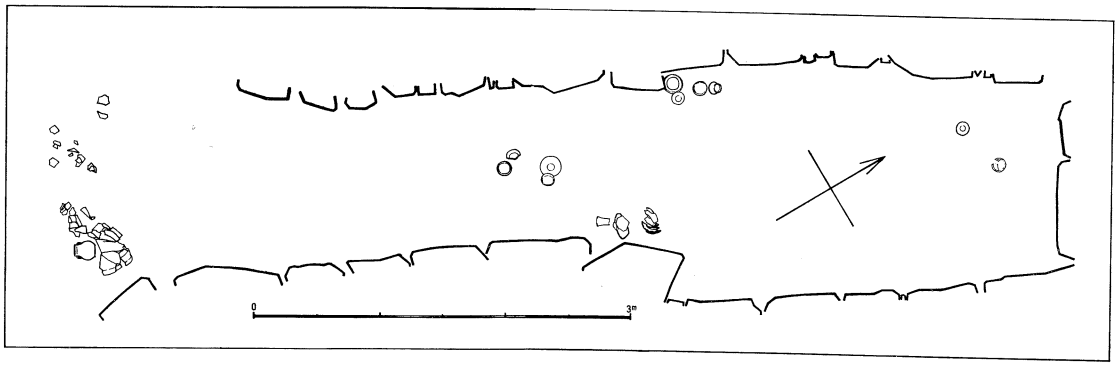
被葬者と時期　石室内において木棺・棺台・棺釘等埋葬状態を直接示すものは認められないが，供献の状況を示す須恵器の出土状況からそれを推定できる。

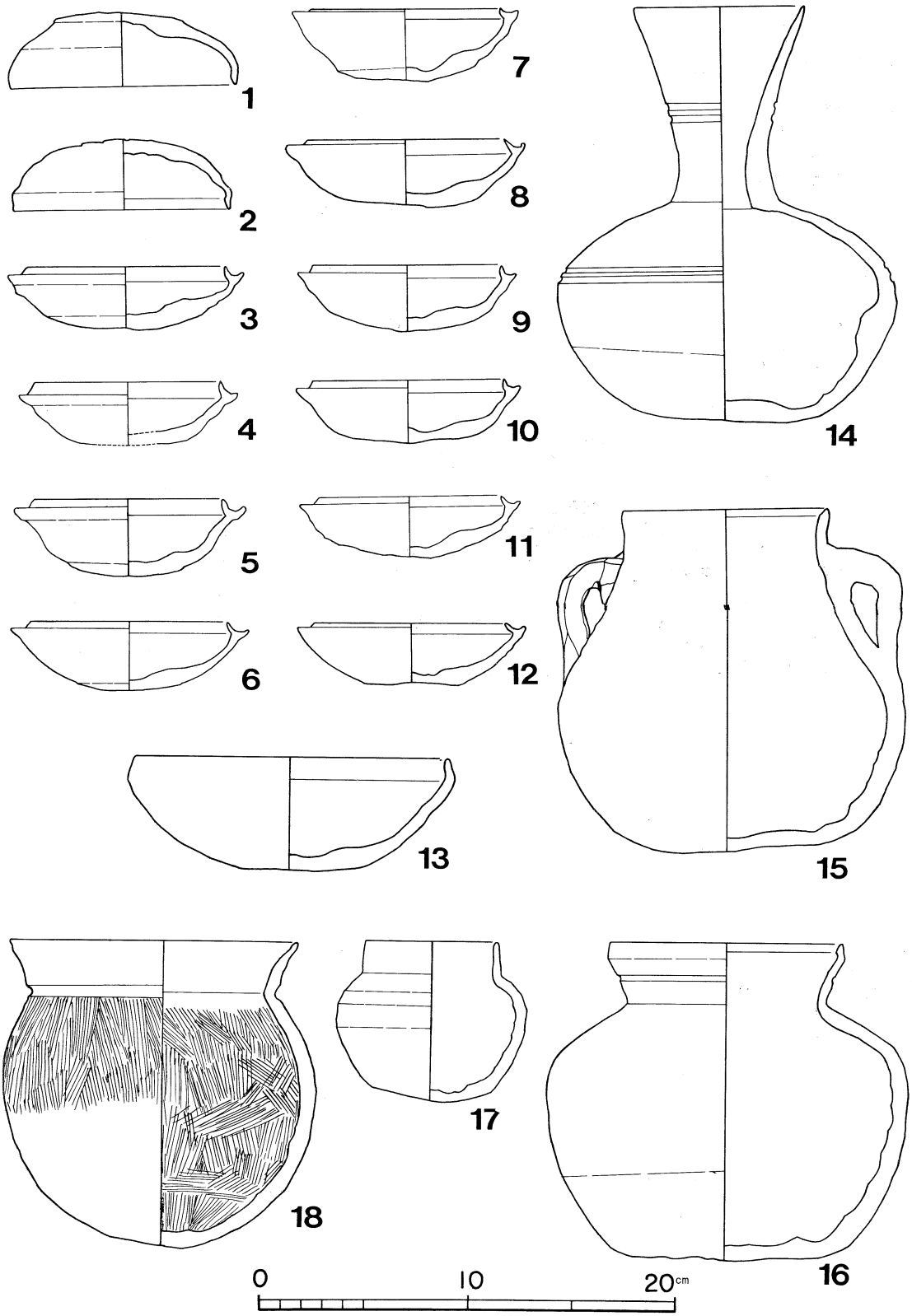
前記の如く石室内には，須恵器を中心とする4つの遺物群が認められ，これによりA群に伴なう埋葬を玄室中央部奥壁よりに1棺，B群に伴なうものを玄室内左袖部に1棺，C・D群に伴なうものを玄門部より羨道部にかけて1棺，計3棺が復原でき，3体以上の埋葬が本石室内に行なわれたことが想定された。

本古墳営造の時期については，玄室，羨道部より検出された各群の遺物が同一の時期形成に伴なうものであり，低い矮小化のめだつ坏等が示す時期，すなわち7世紀前葉と考えられ，3被葬者が，相前後して石室内に埋葬されたと推定できた。

小結　B－3号古墳西裾はB－2号古墳東裾と重複しており，本墳裾部の盛土状況を精査すると，土器形式上に現われない築造時期の差を知ることができた。すなわち，本古墳築成に伴なう周溝が，後にB－2号古墳構築の際，盛土により埋められていることが判明し，B－3号古墳からB－2号古墳へという古墳築造順序が決定された。同様に，B－4号古墳も本古墳東裾部を削除していることから，本古墳築造以後にそれが構築されたものであることが理解され，また当初本古墳前庭部で終了した墓道が，のちB－4号古墳築造に伴ない東方へ分岐延長されたことが知られ，それを裏ずけている。B－3号古墳は，B支群東半部を占地し，その位置関係からみて支群西半部基幹道に接して築造されたB－1号古墳より後に築造されたものであり，結果B支群4基の内，第2次営造に係るものであることが理解された。　（山沢義貴）

（第B－3号古墳・石室平面図）





第B－3号古墳・遺物実測図

第D－3号古墳の調査

D－3号古墳は，截頭方錐台基の上に埋葬施設である方丘をのせた方形墳であり，木棺直葬を内部主体としA－3号古墳と同一の構造を持つ。

位置　本古墳は，狐栗古墳群D支群に所属し，D支群東端部に位置する。西方のD－2号古墳の後背部に築造され，西北方のE－3号古墳と裾を接している。

墳丘　調査前墳丘は東西径10.6米，南北径10.4米，墳丘高14.5米の円墳と考えられたが，後世の堆積土や流出土を除去した結果，四隅が正しく東西南北を指し，西，南隅に張り出しを持つ截頭方錐台基上に方丘をのせた平面方形の古墳であることが判明した。本古墳の西北に隣接して存在するE－3号古墳構築の際，西北辺裾の大部分が削土され現在截頭方錐台基の正確な規模を明らかにしえないが，復原すれば各辺10.8米を測る方形であり，西南，西北辺延長上に巾4.60米，4.65米を測る張り出しが各々東南，西南方に伸び注意を引いた。台基高は東南より西北に沈む地形に影響され東南裾0.55米，西北裾1.65米と差異を示し，張り出し部は，西隅部60糎，南隅部40糎と比較的低い。台基の形成については，地山を一辺10.8米の方形で劃し，中央高1.40米の地山台基を作り上部に明茶褐色土層25糎を水平に積層している。西，南両張り出し部とも黄褐色砂礫地山層の掘り残しで形成されたものであり，盛土は全く行なわれていないことが知られた。

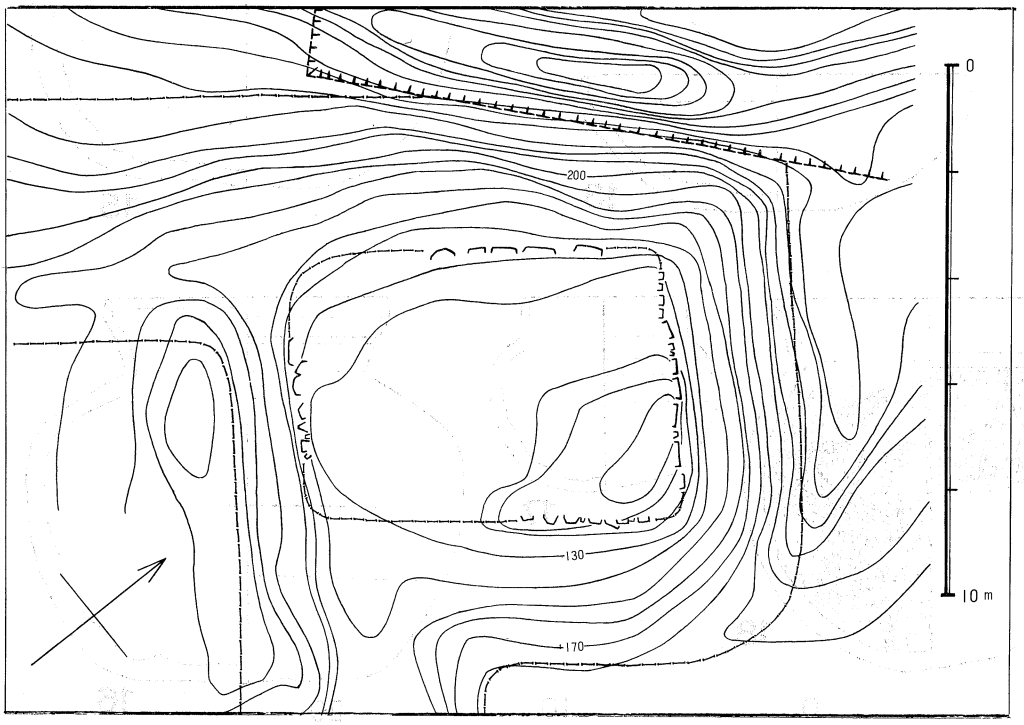
上部方丘は，後世の封土流出の激しさに伴ない垂直石積最下段の一部を留める以外その大半を失っており規模を確定しえないが，東北・西南辺5.30米，東南・西北辺7.40米の長方形であったと想定できる。現在方丘高40糎を測るが頂部95糎が流出していることが知られ，復原高1.35米と想定できる。上部方丘の形成は台基上面より黒褐色土層20糎をレンズ状に積層しており，以上は現存せず不明であるが方丘上面は平坦水平に整えられたと推定できた。垂直石積はA－3号古墳の所見とほぼ等しいが石材は若干大きく，旧規は7～8段積み上げ1.35米高の方丘上面まで及んだと想定できる。台基裾調査の結果，周濠・葺石等の設置は認められなかった。

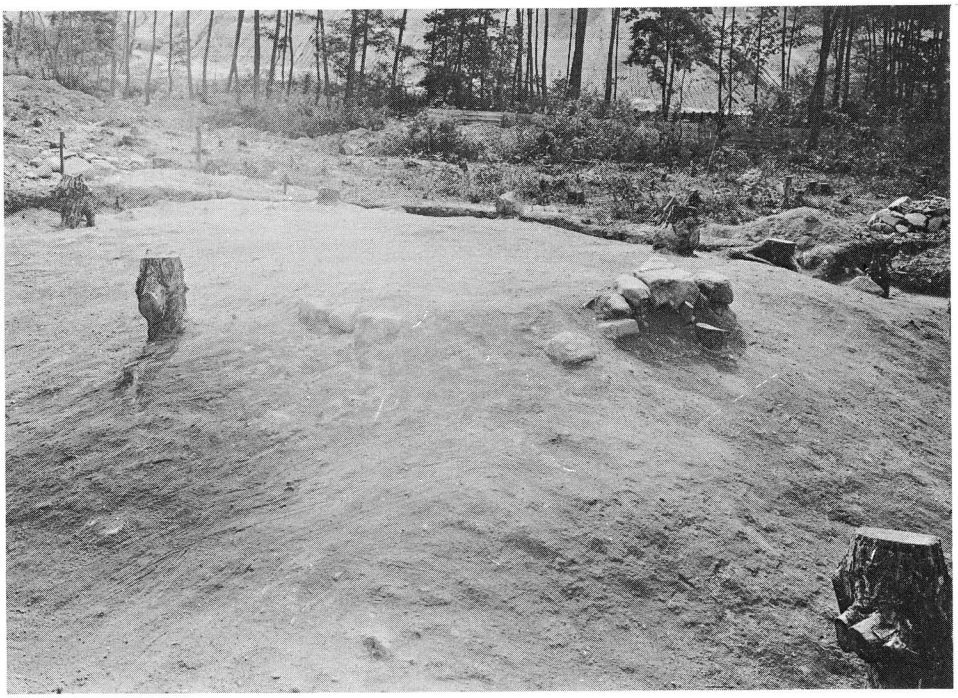
埋葬遺構　調査以前より，石材の露出，被掘壙等が認められないため，木棺直葬壙と考え，流出堆積土を除去し上部方面より台基裾部まで精査を重ねたが埋葬遺構は検出されなかった。調査最終時方丘・台基断面を取ったが諸埋葬遺構の存在は認められず，前記の如く上部方丘95糎流失平夷の際，木棺直葬遺構も流失したものとと想定された。

遺物　本古墳調査時に検出された遺物は後世の攪乱堆積土層内の埴質・瓦質土器片若干数であり，本古墳営造時に係る遺物は全く認められなかった。

小結　D－3号古墳は，截頭方錐台基とその上部にのる埋葬施設である方丘より墳丘を構成し，木棺直葬を埋葬形態とするなどA－3号古墳と類似する。その上D支群3基中最奥部に位置し支群中最も遅れて構築されたものであり，築造時期についてはA－3号古墳と同様7世紀中葉をあてることが妥当と考えられる。

（黒崎直）





（第D－3号古墳・全景）

（第D－3号古墳・墳丘裾）

第C－1号古墳の調査

C－1号古墳は西向きに開口し，東西に主軸を置いた両袖式の横穴式石室を持つ円墳である。

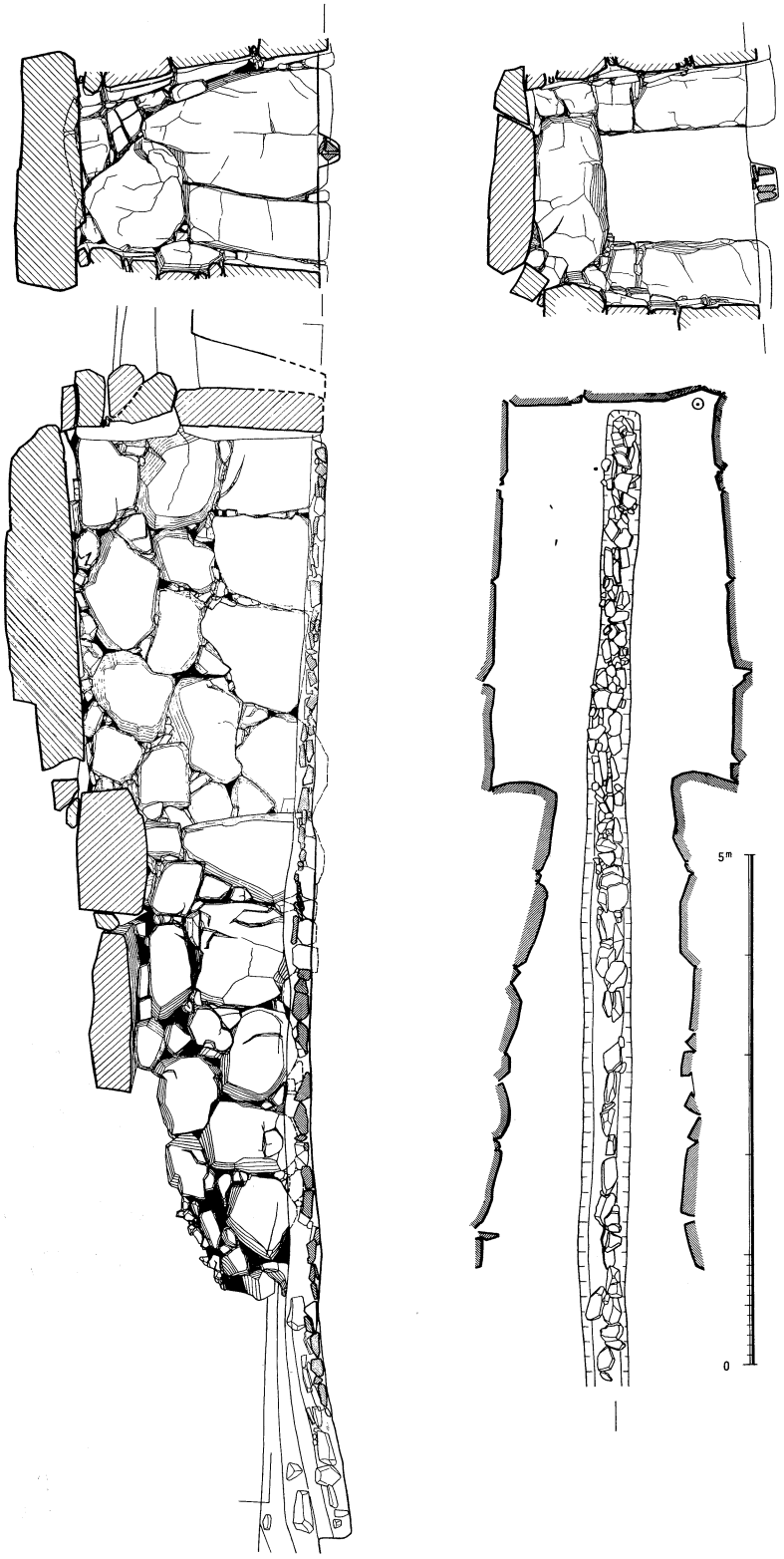
位置　本古墳は，今回発掘調査した古墳群の東端に位置する。東西に主軸を持つことなどから，B支群と区別され，一群をつくりC支群をたてた。

墳丘　墳丘の規模は南北径14.6米，東西復原径14.3米をはかり，墳丘高は南から北，東から西へ沈む地形に影響され東裾1.17米，西裾3.32米南裾82糎，北裾2.12米とかなりの差異を示す円墳である。後世の堆積土流出土を除去した結果，南側墳丘裾部は後世の攪乱，東裾部は道路のため裾部は破壊されていたが，旧規は墳丘径15.4米，　正面高3.65米をはかることが判明した。墳丘の形成は東から西へ地山が傾斜していることから旧地表も同様であったと考えられ，その地形を基底とし，北では地山を長さ1米，深さ10糎を削土し，南側に中央基底を作り，レンズ状に黒褐色土層・明茶褐色土層・茶褐色土層を積層した後，全面に暗褐色土層でもって被覆していることが知られた。墳丘裾部を調査した結果，周濠・葺石・埴輪等の設置はなかったことが知られた。

掘方　本古墳の内部主体たる横穴式石室は，東から西に下る傾斜地に東西に主軸を置き掘穿された掘方内に営造されている。この掘方は傾斜地に高所に向って，上縁東西9.75米，高さ最奥部で1.04米をはかるように作られたことが知られる。下底部は東西9.05米，南北3.90米であり，奥壁部と羨門部との下底部のレベル差は羨門部で10糎低く傾斜を示している。石室は斜面に穿たれた掘方の南へ少しよせて架構されており，且つ掘方内に玄室・羨道とも造作されていたものと考えることができる。

石室　本古墳の内部主体たる石室は，西に開口する両袖式横穴式石室であり，調査前すでに開口し羨道の天井石の一部は除去されていた。石室の全長8.68米，玄室長3.08米，巾奥壁で2.03米，玄門近くで2.37米と広がり，高さ2.4～2.1米と奥壁から玄門へと低くなっている。羨道は長4.88米，巾玄門で1.7米，羨門2.1米と広がり，高さ1.5米，右袖の出56糎，　左袖の出64糎をはかる。

（第C－1号古墳・天井石）



(第C－1号古墳・実測図)

玄室において，奥壁は下段には巨石を配し，二段積で，両側壁は三段積みしており，奥壁の一段目と両側壁の二段目の上面がそろうように架構されている。奥壁は垂直に架構されているが，両側壁は少しの持ち送りがみられ，天井石は長辺を主軸に平行して一石配する構法をとっている。

羨道は両側壁とも二段積みしている。天井石は長辺を主軸に直交させて現在二石配されているが，本来は三石配されていたと考えられる。石室中央部にみられる排水溝は奥壁内面より広く7糎の位置の地山から巾30糎～50糎の上肩，深さ8糎～33糎のU字形に長さ10米の溝を掘穿し，その内に平石を掘方の両側に立て，平石でふたをしている。排水溝は羨門外前方1.39米外まで続き，石室外までおよんでいたことが知られる。溝の下底レベル差は西端で73糎で玄室内が高いことが知られる。床面は排水溝をおおい置土し水平にしてつくられていた。

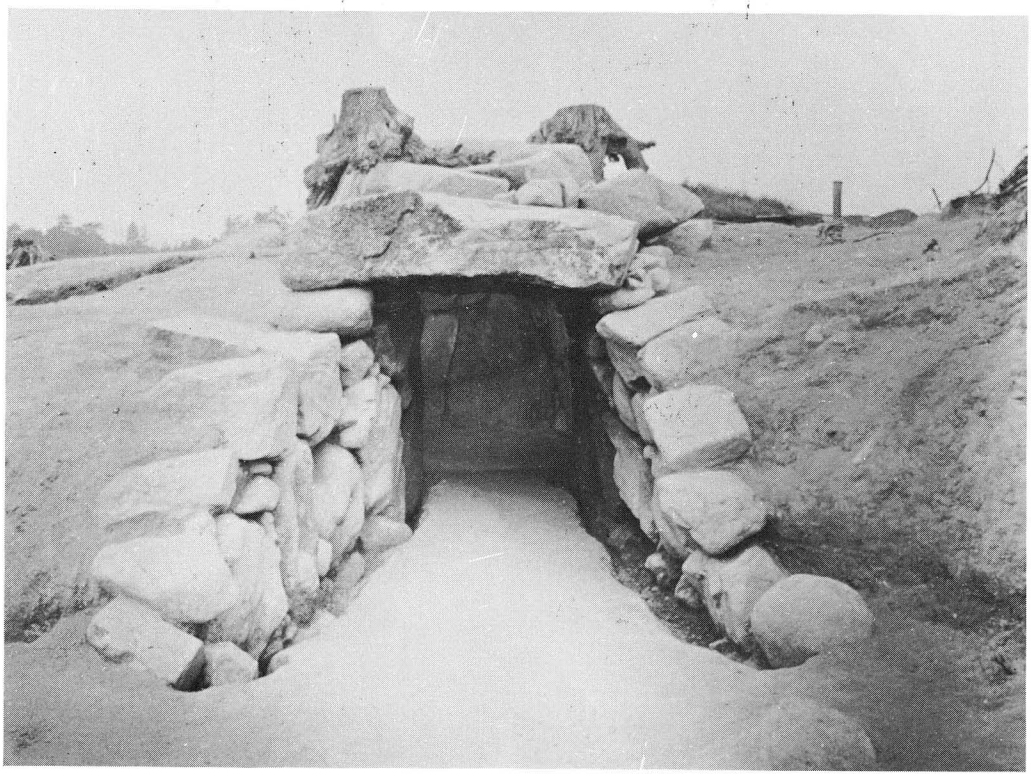
遺物出土状況　石室内は攪乱されており，攪乱層内より陶質土器・埴質土器・小像が出土し，床面の旧位置には奥壁右側に陶質土器の蓋1個・石室奥中央部に金環1点・鉄製釘3本がみられた。

遺物　床面旧位置からは7世紀中葉の宝珠形つまみを有する口径10糎の坏の蓋1個，0.7×0.24糎の楕円の断面を持つ青銅芯で径2.7糎の金環1点，鉄製釘3本。攪乱層から7世紀前半の陶質土器の坏の身4個体，蓋6個体，高坏3個体，台脚付長頸壺2個体，短頸壺2個体，甕1個体，埴質土器の壺2個体分の破片が出土した。又同じ攪乱層内より中世の瓦質土器の高台付浅皿の数多くの破片と青銅製の小仏像が出土した。

被葬者と時期　石室内には7世紀前半と中葉の二時期にわたる陶質土器が出土していることから，少なくくとも2体以上恐らく数遺体が埋葬されたと考えることができるが，攪乱がはげしく，具体的に被葬者の数を示すことはできない。

小結　本古墳は，石室内の遺物中陶質土器が7世紀前半と中葉の二時期を示し，他の古墳と同様ではあったが，他の横穴式石室の主軸と異り，石室の規模，石材も相異し，また，排水溝を有すること，墳丘の封土より6世紀後半のものとみられる陶質土器の坏の一部が出土していることから考えて，6世紀後半以降に築造され，今回発掘調査した古墳群の中で最古の古墳の一であろうと考えられた。　（中井貞夫）

（第C－1号古墳・石室）



第B－4号古墳の調査

B－4号古墳は，南西に開口した小形の横穴式石室を内部主体とする小円墳である。

位置　本古墳はB支群の東方最奥部の高所に位置しB－3号古墳の東裾部に内部主体を配する。

墳丘　本古墳は発掘調査前，封土の流出，東側の斜面からの流積土により，古墳としての徴証がなかった。こうした状態のため，発掘調査においても全く封土を知ることはできず墳丘の旧観をうかがうことは困難ではあったが，掘方が全長3.25米をはかり，石室復元高が1米前後と推定され，加えて，地山が石室主軸の東側で掘方の東縁上肩から下り傾斜を呈し，2.40米で終っている事実があることなどから，もし旧地表を墳丘の形成に利用したと考えるならば墳丘は径5米，墳高1.20米前後を測る小規模な円形墳かと思われた。本墳の封土は全て流出していたが，西半分はB－3号古墳の墳丘を利用しており，墳丘推定地全域を精査した結果墳丘には周濠・葺石・埴輪等の設置はなかったものと考えられた。

掘方　本古墳の内部主体たる横穴式石室は，B－3号古墳の東側墳丘裾部にあって南北に主軸を置き，南に開口した長方形の掘方内に営造されている。この掘方は，その上縁において東西2米，南北3.25米をはかる。深さは最深部で50糎をはかる。下底部は東西1.50米，南北2.90米で平底である。

右側壁内面より83糎外方に掘方東縁上肩があり，側壁最下底石材底面と同レベル，内へ38糎の地に掘方東縁下底がある。左側壁内面より63糎外方に掘方西縁上肩があり，側壁最下底石材底面と同レベル，内へ33糎の地に掘方西縁下底がある。奥壁内面より54糎外方に掘方北縁上肩があり，奥壁最下底石底面と同レベル，内へ35糎の地に掘方北縁下底部がある。従って，B－3号古墳の墳丘裾部に掘穿された掘方の北と西によせて石室を架構しており，且つ掘方内に石室の全てが造作されていたと考えられる。

石室　本古墳の埋葬主体たる石室は南西に開口する横穴式石室であり，破壊がはなはだしく天井石はすでに遺存せず，奥壁と左右両壁は大部分が最下底石しか残存していない。現存する石室の規模は，二段積みの

（第B－4号古墳・石室）

石室で全長2.47米，巾は奥壁部で60糎，中央部で78糎，入口部で58糎をはかる中ぶくらみのプランをもち，高さは床面より57糎をはかる。石室は奥壁，両側壁に大きな石材を立てて横長に設置して最下段とし，二段目は小石を小口積みし上面を整え天井石を架構しやすくする。棺高より少し高い位置に天井石の下底部をもってくるためであろう。床面は平石を敷詰め，その間を小石で隙間なく詰めて水平な床面を形成している。

本石室の特徴は，羨道部が省略されて，玄室のみ構築されていることであって，この石室も全長2.50米，巾0.78米～0.58米，高さ0.60米のように一棺を埋葬することのみを考慮に入れて構築されており，横穴式石室としての本来的な機能を失いつつあるかの如くである。羨道部は省略されてはいるが，横穴式石室としての意識のもとに構築されたらしく，石室南側に掘方は存在していたが，その掘方内には壁を作るような石材の設置された痕跡は見られず，石室外南側に2個の石材が置かれており，それを羨道閉塞石として用いていたかもしれないと考えられるにとどまる。いずれにせよ，一棺埋葬用の簡略化した横穴式石室の一種と考えられるであろう。

被葬者と遺物と時期　本古墳は一棺埋葬用の横穴式石室であるので，当然被葬者は一人である。遺物は何一つなく時期は明確にし得ないが，B－3号古墳より新しい事実を知り得たにとどまった。

小結　B－4号古墳は一棺埋葬用の簡略化された横穴式石室をB－3号古墳の東墳丘裾部に持つとはいえ独立し，B古墳群中後期に属する。　（中井貞夫）

解　説

狐栗古墳群は滋賀県甲賀郡甲西町大字針小字狐栗に所在し，現集落の背後0.7粁の地，針川の東岸の平坦地に営造された全21基よりなる後期古墳群である。21基の古墳は，幹線路，支線路により7支群に区別され各群平均3～4基より構成されており，各支群最奥乃至は支線路に面する2墳の背後に所在する古墳は，いずれも木棺直葬の方墳や小石室を具えるものであり横穴式石室をもつ通有な円墳とその間に極めて明瞭な対照を示した。

そうした内容を表示すれば下表の如くであるが今詳晰に検討すれば，まず，発掘調査したA－2号古墳，B2・3号古墳C－1号古墳はいづれも通有な横穴式石室を構えた円墳であり，6世紀末に築造されるもの，7世紀前葉に築造されるものがあり，各支群間の横穴式石室をもつ円墳は1世代1墳と成層的に成立しており，内容はいずれも家族墓とするに相応しく最小限3名以上を被葬していることが考えられる。一方追葬については必ずしも6世紀末築造の石室墳が7世紀前葉のそれよりも早く追葬を切り上げている事実はなく，両石室墳の被葬者との類縁関係に応じて追葬が行なわれていた事実を示している。ただ横穴式石室墳の累代的成層的形成の事実は家長の死を契機とするか，それを予測しての営造と思われ，その故に縁辺して石室墳が誕生するものと考えられた。追葬者はこうした家長との類縁者であって本人を中心に前後各2世代を含む場合が十分考えられ，それがため追葬時期が各墳それぞれに異る結果を生むに至ったのであろう。さて，木棺を直葬する方形墳，乃至は小石室を具えた古墳はいづれも7世紀中葉の築造に係るものと推察されるが，こうした古墳は横穴式石室のもつ一墳多時，家族墓，追葬という性格と異り一墳一時・個人墓・合葬という特色ある内容をもっている。こうした内容をもつ古墳

（狐栗古墳群・編年表）

支群名／種別	A支群	B支群	C支群	D支群	E支群	F支群	G支群	墳丘・他	時期
横穴式石室	A－1 A－2	B－1 B－2 B－3	C－1	D－1 D－2	E－1 E－2	F－1 F－2	G－1 G－2 G－3	円墳・家族墓 多葬墓	築造 6世紀末から7世紀前葉 追葬終了 7世紀前葉から中葉まで
小石室 木棺直葬	A－3	B－4		D－3	E－3	F－3 ※	G－4 ※	？・単葬墓 方墳・合葬墓	7世紀中葉
備考		B－3はB－2より古い	一部消滅か	D－3はE－3より古い	E－3はD－3より新しい	F－3 末定	G－4 末定		

は各支群に1基づつ見られるのであるから，追って家族類縁者を追葬する計画はなく，当初よりこうした家長乃至は夫婦・類縁者合葬を目的とし意識的，計画的に造墓したことを示しており，7世紀中葉における造墓意識の大きな変化がここに指摘しうることとなるのである。しかも，こうした葬墓が各支群1基づつであり2基を成層的に形成していない事実は7世紀中葉の僅かな時間後，古墳造営の風が各家族＝各支群ごとに終焉した事実を暗示していると見ることができ，ここに，6世紀末乃至は7世紀初頭における追葬を意識した横穴式石室墓の成立と展開，7世終中葉前半における追葬を断った木棺直葬墓への移行（石室内追葬はつづく），ついで7世終中葉中ばごろの古墳造営の終焉という3段階を等しく狐栗古墳群各支群が経過したことを知りうるのである。

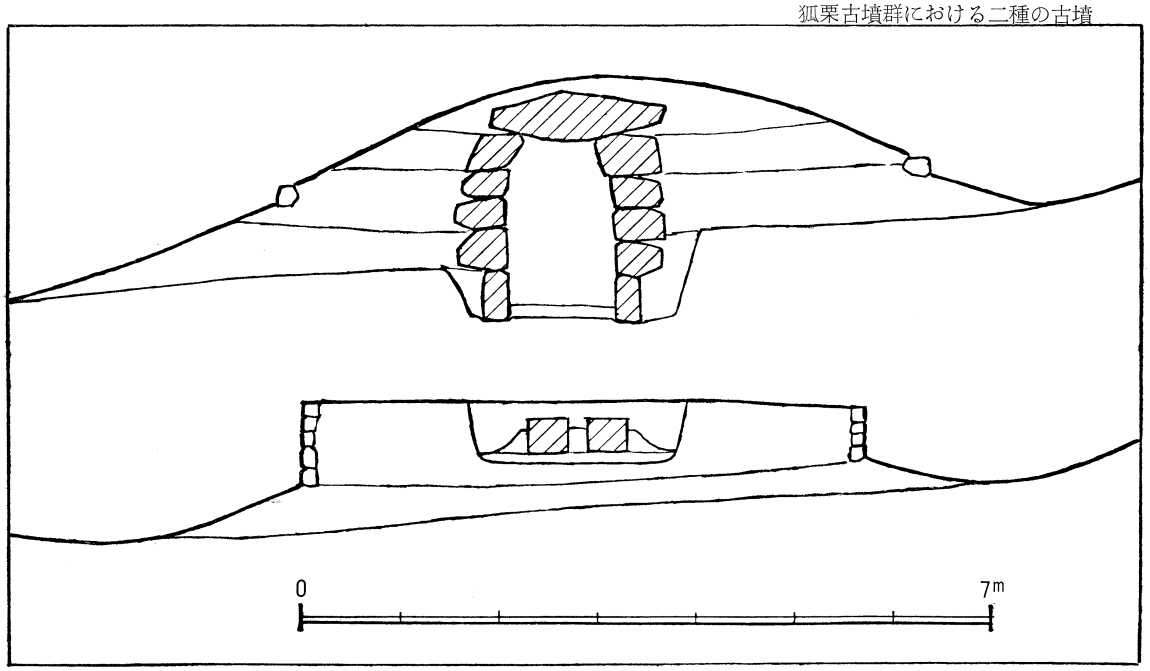
本例と相似た場合は，野洲川をへだてた対岸，甲西町菩堤寺の西はづれ竜王山古墳群にも指摘され5基1群中尾根を異にする1墳を除外すれば下降する1尾根上に4横穴式石室墳が直列し最高所に存する第4号古墳のみは小石室・単葬墓であった。しかし甲賀郡水口町波涛平古墳群にはこうした追葬を考えない古墳の成立はなく，一見相似した蒲生郡東部の木棺直葬墳も数多い追葬が指摘され異った性格を示しており，他に現在そうした展開を顕示する例は乏しい。ただ県外ならば大阪府南河内郡や奈良県などに同様な追葬を意識しない横口式石室墓や小石室が指摘されるが，群集墳における事例は乏しく今後に期して俟つ所が大である。恐らく，造墓意識の変化と造墓の終焉は狐栗古墳群の場合各支群＝各家族をおおう形で見られ，そこに社会的背景，起因のあることを思わせるのである。

いづれにせよ，狐栗古墳群は追葬を可能とする横穴式石室をもつ円墳の営造後，終焉を飾る特殊な単葬・合葬を内容とする木棺直葬の方形墳，小石墓をもつ小円墳が成立する。この二者を復原的に図示すれば下図の通りであり，よくその性格の差を示している。木棺直葬の方形墳は截頭方錐状台基上に埋葬施設である方丘を載せる特色あるものであって，従前類例少なく，よく被葬者の性格にもとづく造型であることが理解できる。こうした造型をもつ古墳の成立が広汎に成立したとは考えられず，本古墳群を特色づけるもの，ひいては顕界の家族の性格をも暗示するといえよう。

本古墳群21基中7基が今回幹線農道設置のため止むなくその盛土の対象となり，事前発掘調査を実施したが，その成果の重要性に鑑み4基を移築しその公開をはかった。幹線農道を迂回せしめ多大の経費を投じて直壁石垣に工法をかえ，埋没さけがたい7基についても発掘調査，一部移築を実施し，のち残存地域全般を緑地化する計画をたてられた，タキイ種苗株式会社に厚く謝意をのべるとともに，炎天下調査に従事された調査員諸氏，種々御協力を賜わった地元針区に謝辞をのべたいと思う。

（水野正好）

狐栗古墳群における二種の古墳



昭和43年3月15日　印　刷
昭和43年3月30日　発　行

甲賀郡甲西町
狐栗古墳群発掘調査報告書

発行者　滋賀県教育委員会
印刷者　大津紙業写真印刷株式会社